
文化人類学の先駆者・森丑之助の研究

課題番号 12610307

平成12年度～平成13年度科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)）研究成果報告書

平成14年3月

横浜国立大学附属図書館



11446226

代表者 笠原政治

(横浜国立大学教育人間科学部教授)



19
研究

は し が き

研究代表者 笠原 政治

研究成果の概要

森丑之助は、日本の台湾統治が始まった1895年（明治28年）の直後から約20年間、ほぼ単身で台湾先住民族（現在の正式名称は「台湾原住民」）の山深い居住地を精力的に踏査した。タイヤル語、ブヌン語など、台湾原住民の諸言語を習得。それらの異民族と長らく親交を重ね、「日本の友人」として厚い信頼関係を築き上げたこの人物は、まさしく台湾研究の開拓者であるとともに、日本における文化人類学の先駆者と呼ぶことができるであろう。同時代のヨーロッパやアメリカを見渡しても、森に匹敵するほどのフィールドワークをなし遂げた研究者は決して多くはなかったはずである。

そのような森という人物と彼の業績は、ごく一握りの専門家を除いて、残念ながら今日の日本ではほとんど知られていない。おそらく、1923年（大正12年）の関東大震災によって、収集した膨大な調査資料（写真資料を含む）や原稿その他を悉く失ってしまい、1926年（大正15年）に投身自殺説さえ囁かれるほどの不可解な最期を遂げた、という彼の身に生じた不幸な顛末が、この傑出した野外調査者の存在を歴史の彼方へ埋もれさせてしまったのであろう。百年前の台湾で幾度も行動を共にした鳥居龍蔵とは違い、人類学の研究者として、また優れたフィールドワーカーとして、今までに輝かしい脚光を浴びたことが一度もないのである。近年、台湾現地では、森とその研究の軌跡を発掘・再評価しようとする気運が高まり始めている。そこでは、時代の制約をふまえながらも、台湾研究のパイオニアとしてこの一人の日本人を称賛するという姿勢が一般的なようであり、知名度が限りなくゼロに近い日本の学界とは大いに状況が異なっているのである。

森が生前に公刊した著作のうち、単行本や写真集を日本国内で入手するのは容易なことではない。また、主に論考や随想などを発表した雑誌類も、日本の図書館や大学の研究室にはあまり所蔵されていない。まず必要なのは、森の著作を系統的に収集・整理し、目に触れやすい形にまとめ上げることであろう。本研究の主旨は、今後の本格的な森丑之助研究に向けて、そうした資料面での基礎づくりを行うという点にあった。

二年間の研究成果についてその概要を示すと、およそ以下ようになる。

- (1). 森の著作を、単行本、雑誌掲載稿、新聞記事、手書き草稿など、全般に亘って収集し、それらの大半をデータベース化した。併せて、年譜、著作目録、関連文献目録などを作成。残された著作物の範囲内で、研究の概略をほぼ明らかにすることができた。
- (2). 同じ関心を持つ台湾の研究者たちと密度の濃い意見交換を行い、森とその業績に関する国際的評価を高めるよう努力した。
- (3). 森の縁故者へのインタビュー、出身校の確認など。

横浜国立大学附属図書館



11446226

(4).近い将来、日本で『森丑之助著作集』（仮称）を刊行するために、その準備作業を進めた。

日本の学界では、いま文化人類学という知のあり方そのものが根底から問われ始めてきている。圧縮した言い方をするならば、「日本の人類学」はどうあるべきか、という問いかけが重みを増してきたのである。森丑之助という忘れられた先駆者に改めて光を当てることは、そのような問いに対して、学問の揺籃期にまで遡って答えを求めようとする一つの試みにもなると考えられるであろう。

研究組織

研究代表者： 笠原政治（横浜国立大学 教育人間科学部 教授）

交付決定額（配分額）

（金額単位：千円）

	直接経費	間接経費	合計
平成12年度	500	0	500
平成13年度	500	0	500
総計	1,000	0	1,000

研究発表

(1) 学会誌等

1. [単] 笠原政治「解説：伊能嘉矩と『台湾蕃人事情』」『台湾蕃人事情』（伊能嘉矩／栗野伝之丞、1900年刊の復刻版）1-13頁、草風館、平成12年（2000年）6月20日
2. [単] 笠原政治「『認識臺灣』の台湾原住民に関する記述」『台湾原住民研究』（風響社刊）第5号、132-149頁、平成13年（2001年）3月31日
3. [単] 笠原政治（編）「台湾原住民関係文献目録(1)」『台湾原住民研究』（風響社刊）第5号、177-200頁、平成13年（2001年）3月31日

(2) 口頭発表

1. [単] 笠原政治「民族と言語 — 台湾原住民を中心に —」国際交流基金アジアセンター2000年度第2期アジア理解講座「台湾を知ろう」第3回、国際交流基金アジアセンター、平成12年（2000年）10月13日

(3) 出版物

1. [共] 日本順益台湾原住民研究会（編）『台湾原住民研究概覧 — 日本からの視点 —』430pp.、風響社、平成13年（2001年）2月18日

研究成果報告書
(文化人類学の先駆者・森丑之助の研究)

目 次

はしがき	(1)
森丑之助と台湾原住民研究	(5)
1. 忘れられた先駆者	(5)
2. 台湾へ	(6)
3. 驚異的な踏査の足跡	(6)
4. 付かず離れず — 台湾総督府との微妙な関係 —	(10)
5. 業績、そして幻の業績	(13)
6. 大正15年7月3日	(16)
7. おわりに	(17)
謝辞	(18)
註	(19)
参照文献	(21)
*	
森丑之助年譜	(24)
森丑之助著作目録	(28)
森丑之助関連文献	(37)
*	
付論1 — 森丑之助の著作を入手するには	(39)
付論2 — 森丑之助の母校	(40)
付論3 — 佐藤春夫が描いた森丑之助	(42)
付論4 — 楊南郡〔編訳〕『生蕃行脚』について	(47)
*	
【写真】森丑之助	(4)
【図】森丑之助台湾原住民居住地踏査図	(8)
【表】台湾原住民の分類・民族名称の変遷	(12)
【記事】森丑之助の死去について報じる当時の台湾地元紙	(17)
【写真】現在の長崎県立長崎商業高等学校	(41)
*	
見 本 — 森丑之助「私の悪魔主義」〔1920年〕	(49)
入力見本 — 森丑之助「私の悪魔主義」〔1920年〕	(50)



【写真】 森 丑 之 助

森雅文氏提供。40歳代の写真と考えられる。

森丑之助と台湾原住民研究

笠原 政治

1. 忘れられた先駆者

森丑之助（もり・うしのお、1877-1926）。明治から大正期にかけて台湾原住民¹の調査研究に生涯を捧げた人物。今の言葉で言えば、フィールド派の文化人類学者である。本人は丙牛（いびぎゅう）という筆名を好んで使った。

森は、日本の台湾統治が始まった1895年（明治28年）の直後から約20年間、ほぼ単身で、しかも身に寸鉄も帯びずに、急峻な山岳地帯を中心にした台湾原住民の村々を縦横に調査して回った。タイヤル語やブヌン語、パイワン語などを巧みに使いこなし、山の民から厚い信頼を寄せられていたという。まちがいなく森は、揺籃期における台湾原住民研究の第一人者であった²。

しかし、この森という人物は、後世の研究者たちからはほとんど顧みられることがなかった。現在、日本の人類学界では、まずもって彼の名前さえ大方の認知を受けていないであろう。一般の知名度が低いのは台湾においても同様である。森とその研究業績がこれまで正当に評価されてこなかった理由はいくつか考えられるが、おそらく、1923年（大正12年）の関東大震災によって膨大な収集資料と未刊原稿を悉く失い、1926年（大正15年）に投身自殺らしい不可解な最期を遂げたという不幸な境遇が、その主たる要因と言えるであろう。生前に公刊された著書、論文、随想などですら、今では目に触れにくく、入手不可能なものが少なくない。

風向きが大きく変わり始めたのはつい最近になってからである。まず、1979年に森の著書『台湾蕃族志 第一巻』を復刻した台北の南天書局（社主・魏徳文氏）が、続けてその写真集『台湾蕃族図譜』[全2巻、1994]を再刊した。日本では宮岡真央子による初の森研究[1997]が現れた。そして、数年前には台湾原住民研究家の楊南郡氏が森の一部著作を中国語に翻訳・出版し（『生蕃行脚』[2000]）、地元で大きな反響を巻き起こしたのである（「付論4」を参照）。森の死後長い年月を経て、ようやくこの「幻の先駆者」に対する再評価の気運が高まってきたものと考えてよいであろう。

ここでは、それら一連の動向を踏まえながら、台湾原住民研究者あるいは文化人類学者としての森丑之助について、最小限の事柄を述べておきたい。今後この人物を本格的に論じ、また『森丑之助著作集』（仮称）を刊行するための予備的作業と考えていただければ幸いである³。

2. 台湾へ

森丑之助は、1877年（明治10年）1月16日に京都市五條室町で生まれた（以下、「森丑之助年譜」を参照）。干支で言えば「丁丑」の年である。幼年期、少年期のことはほとんど何も分かっていない。10歳台の半ばになって、長崎商業学校で中国（支那）南方官話を学んだ（「付論2」を参照）⁴。そして、在学中に陸軍の通訳に応募。日清戦争の終結で中国大陸の地を踏むことこそできなかったが、新たに割譲された台湾へ通訳として赴く道が開かれた。1895年（明治28年）9月の渡台時には、満年齢で弱冠18歳だった。それ以後の森は、生涯の大半をこの南の島で過ごすことになる。

森は前々から台湾に「生蕃」と呼ばれる人々が住んでいることを知っていたが、その調査や研究にまでは考えが及ばなかったらしい。その点は、ほぼ同じ時期に伊能嘉矩と鳥居龍蔵が台湾原住民の研究を目的にして海を渡ったのとは明らかに事情が違う。後に森はそうした渡航直後の時期を振り返って、1896年（明治29年）頃から東京帝国大学が台湾へ派遣した専門家たちのことに触れ、「当時我々は子供ながらに此事を聞いて非常に愉快に感じたのであります」〔森 1913b:31〕と述べているが、その述懐も、彼が台湾原住民の調査を始めた動機について十分に説明しているとは言い難い。おそらく最初は純粋な好奇心から山地の人々に接し、その後に帝国大学が派遣した学者、すなわち鳥居龍蔵などと出会って、次第に好奇心が人類学研究の方向へ姿形を整えたのであろう。やがて陸軍通訳の仕事からは完全に身を退いてしまう。

3. 驚異的な踏査の足跡

森丑之助は1896年（明治29年）1月、台北から南西に当たるタイヤルの居住地に足跡を印した。最初の山地体験である。それを皮切りにして以後は毎年、ときには年間の大部分の日子を費やして、中央山脈の一带へ、東部へ、そして離島の紅頭嶼（現在の蘭嶼）へと、繰り返し踏査の旅を続けた。晩年の様子は記録が乏しいためよく分からないが、森がとくに集中して台湾原住民の居住地に足を運んだのは、ある事情があって一時的に台北から東京に居を移すことになった1913年（大正2年）頃までの時期であろう。森の満年齢で言えば、19歳-36歳の足掛け18年間である⁵。

先にも述べたように、森にとって最も重要な転機となったのは、7歳ほど年長の若き人類学者、鳥居龍蔵（とくいりゅうぞう、1870-1953）との出会いであった。鳥居とは1896年（明治29年）に台湾の東部で知り合ったらしい。その後、1898年（明治31年）と1900年（明治33年）には長期間にわたって鳥居の調査旅行に同行し、1900年4月10日の日付で、台湾の最高峰である新高山（現在の玉山）にも一緒に登頂したという〔鳥居 1900(1976:576)〕。探検や登山への情熱が両者の共通点だったのであろう。台湾原住民の調査にあたって、森

は鳥居の通訳や助手の役割を引き受け、鳥居の方はこの年下の若者に人類学の手ほどきをした。まさに得がたい現場教育だったと言ってよい。鳥居の教えを受けて、森の踏査は新たな意味を帯びるようになった。後年森はこの転機の頃を回顧して、「科学的に完全なシステムを以て具体的に蕃族調査にかゝったのは此時を以て嚆矢とする」[1924(55):108]と述べているのである⁶。

20歳台から30歳台半ばにかけて、森はもっぱら台湾原住民の調査研究に明け暮れた。その踏査の足跡は広く、台湾のほぼ全域に及んだ。本人の解説によれば、「蕃情及び其他の事情に依って、北部蕃地のシルビヤ山（後の次高山 — 笠原註）よりタロコ蕃地一帯の一方面を探検することを得ませぬが、此一部を探検すれば台湾全帯に於て足跡を印せざる所なき訳になるのであります」[森 1913b:32]ということになる。楊南郡氏が作成した緻密な路線地図からも、森の驚異的な行動の軌跡がよく窺えるであろう（【図】「森丑之助台湾原住民居住地踏査図」を参照）。

そうした鳥瞰図とは別に、ここではもっとミクロな民族集団単位の調査経過も併せて紹介しておきたい。幸いなことにタイヤルについては『台湾蕃族志 第一巻』に詳しい記載があるので、以下その箇所を引用しよう。

「先づ明治二十九年六、七月、大~~舟~~前山蕃地に赴き、シトノフ蕃各社を踏査し。同八月より十二月の間、東部に航し、台東蕃地巡遊の途次、太魯閣外社蕃の一部と木瓜蕃の全社を巡察し。後花蓮港守備隊に駐屯して屢々木瓜蕃に出入し。三十一年西部に中央山脈を横断しての途次屈尺蕃地に入り。三十二年二月屈尺蕃地より大豹蕃に出て、更に東海岸に到り。同年四月花蓮港より戎克船に塔じ、大南澳に至り、海岸線の旧路を辿りて蘇澳に出で。三十三年五月東勢角より北勢八社及南勢各社を探検したり。蓋し此方面の奥蕃地に於ける邦人の探検は此行を以て嚆矢とす。同年六月阿冷社よりバイバラ蕃を踏査す。此方面も此時代まで同じく邦人の未だ足跡を印せざりし地なり。同七月霧社蕃を調査し、更に八通関方面に赴き、中央山脈の秀姑巒主山を踰えて東部に赴き、復た木瓜、太魯閣両蕃の一部を見、道を転じて同年十月南澳蕃及溪頭蕃等、宜蘭方面の蕃人の一部を調査し。三十四年一月大湖~~汶~~水の両蕃地を踏査し。同二月大安溪上流に出で、再び北勢蕃社を巡り。同六、七月埔里社、濁水河流域の各蕃を踏査す。三十五年より屈尺蕃地に入り。三十七年同蕃地より再び大豹蕃に入り。後暫く南蕃の地方を巡りて北部を見ず。三十九年五月加礼山、五指山等を経てカラバイ蕃地に至り。同六月台北より屈尺蕃地を横断して叭哩沙に出で。同八、九月大湖蕃に入り、更に南勢蕃地を経て、バイバラ蕃、霧社蕃、萬大社を踏査し。四十年二月屈尺蕃地の合屯山に登り、熊空山、彩和山、馬武督等大~~舟~~前山蕃の一部を過ぎ、内湾に出で。同年七、八月埔里社方面の阿冷社、バイバラ蕃、霧社、萬大社に赴き。同九月再び五

指山方面に転じ、マリコワン蕃地に至り。十月大湖溪を遡り、洗水山より鹿場大山を探検し、尚大霸尖山に赴かんとして得ず。中途より引返して汶水溪に下る。四十一年一月埔里社に赴き、霧社及萬大社を経て能高山に登り、中央山系の連嶺を伝ひて清水溪（チヤカン溪）に下り、花蓮港に出で。以て北部蕃界に於ける横断探検を試み。六月復た加礼山に登り、八月洗水山より馬那邦山に至る。四十二年三月屈尺蕃地を経て叭哩沙に出で、溪頭蕃を過ぎ、南澳十五社全部を探検す。此行亦之を以て邦人最初の入蕃に属す。同年五月阿玉山、挿天山に登り、大奔突前山蕃地に横断し。同八月奇萊主山及タウダア蕃、トロコ蕃に赴き。四十三年一月花蓮港に至り、パトラン蕃及タロコ外社蕃の一部を調査し。同三月埔里社より合歡山に到り。同八月北港溪上流のハック、マレツパ、及サラマオ蕃地を探検し。四十四年一月ガオガン蕃地より溪頭蕃に至り。同二月北勢蕃及大湖蕃地を巡り、同三月マリコワン蕃地に至り、李~~珠~~山よりガオガン蕃に出づ。大正元年十月マリコワン蕃地よりキナジー蕃の一部を巡り。大正二年三、四月マリコワン蕃、カラバイ蕃、大湖蕃の地を巡察し。大正三年十二月太魯閣蕃、同四年一月トロコ蕃及サラマオ蕃を調査したり。」〔森 1917:8-10、一部句読点などを補った〕⁷

森の山地調査にはいくつか注目すべき点がある。簡単に列記しておこう。

まず第一は、調査が探検と一体化しているという点である。タイヤルが住む北部山地を含めて、森は中央山脈を西から東へ、また東から西へ、合計9回も横断したという。第二に、台湾原住民の諸言語を習得したことが挙げられる。彼はタイヤル語やブヌン語、パイワン語などを比較的早い時期から使いこなしていたようである。日本の文化人類学では、おそらく現地語による異民族調査はこの森丑之助から始まったと考えられるであろう。これは研究史の上で特筆に値する事柄と言ってよい。そして第三は、その体験の生々しさである。例えば、あるパイワンの村で、森は隣村に対する報復の首狩りに参加を求められ、やむなく供犠の豚を与えることでかろうじてその場を取り繕ったことがあるという〔森 1924(57):166〕。森が調査の初期に触れたのは、台湾原住民のまさに濃密な旧慣世界だったのである。

しかし、そのように山地調査を精力的に行ったことが判明しているにもかかわらず、若い頃の森については、なお謎に包まれている点も少なくない。例えば、彼はいかなる組織にも機関にも所属せず、官憲の保護もないまま、ほとんど独力で台湾原住民の調査を続けたと言われる。自分の研究を「道楽」とまで称しているのである〔森 1913b:33〕。だが、もしそうであるのならば、いったい20歳台における森の私生活はどのようなものであったのだろうか。また、自身の記しているところによれば、1901年（明治34年）以降は調査のときに写真機を携行し、盛んに台湾原住民の人々やその暮らしぶりを撮影したのだという〔森 1915（例言）〕。まちがいなく鳥居龍藏の影響であろう。では、森は高価な写真機

を私費で買い求めたのか。単身で重いガラス乾板を大量に背負い、何週間も険しい山道を歩き続けたのであろうか。残念ながら、誰もが抱くその種の疑問は、いまだに答えられることのない疑問のままなのである。

4. 付かず離れず — 台湾総督府との微妙な関係 —

森丑之助は、晩年に至るまで台湾総督府やその関連機関と微妙な距離をとり続けた。総督府の「理蕃政策」に対しても、屈折した感情で接していたように思われる。

定職のなかった森が1908年（明治41年）4月に総督府の調査機関である臨時台湾旧慣調査会の嘱託となったことは、当時の文書から確認することができる〔小島麗逸 1980:16〕。それ以前から林学者の小西成章など、総督府の職員とは懇意であったが、そうした関係は個人的なものにすぎなかった。明治40年前後、すでに森は台湾原住民の研究で名声を高めていたが、嘱託として同調査会で彼がいかなる役割を求められたのか、その辺の事情は必ずしも審らかではない。後に『蕃族調査報告書』〔全8冊、1913-1921〕と『蕃族慣習調査報告書』〔実質全8冊、1915-1922〕に結実した台湾原住民の旧慣調査に、直接関与することはなかったようである。それは、森が佐山融吉などの調査員たちに向かって、「議論よりも蕃人の真の習慣に就ての事実を記す為に重きを置かれんことを望ましく思います」〔森 1913b:41〕と励ましの言葉を述べていることから分かる。いずれにしても、嘱託として働いたのは、この時期は僅かに2年間半であった。

同じ1908年（明治41年）10月に、森は開館した台湾総督府殖産局博物館の歴史部門陳列員を委嘱された。歴史部門には、土俗と蕃族の2部門があったという〔台湾総督府博物館（編） 1939:378〕。おそらく、そのうち「蕃族」の方を担当したのであろう。すでに数年前から森は総督府殖産局の川上瀧彌を中心にした植物採集に加わっており、その川上が館長に就任した博物館に、いち早く準備段階から関わりを持っていたのである。同館の収蔵品の中で、台湾原住民関係の標本類は、多くが森の手で集められたものだという。彼は間取り調査や写真撮影のほかに、民具・生活用品・遺物の収集にも熱心な研究者であった。ただし、この博物館の仕事にしても、前述した調査会の嘱託にしても、決して将来の生活が保障される職位ではなかった。総督府の吏員に採用されたわけではなく、森の立場は、統治行政の末端に位置する臨時雇にすぎなかった。

1910年（明治43年）になると、今度は総督府蕃務本署に調査課が新設され、森はそこに嘱託として迎えられた。自分はあまり乗り気ではなかったが、すでにその頃には「蕃地」、すなわち台湾原住民の山地居住地への入山制限が厳しさを増していたため、自由に調査を続けるための便宜が必要だった、という主旨の発言をしている。それでも、森はこの処遇を新たな研究活動の機会として積極的に役立てようと考えたらしい。それなりの努力は惜しまなかったと述べているのである。しかし、調査課は僅か3年余りで早々と廃止されて

しまった。そして、その措置に対する憤りから森が1913年（大正2年）に台湾を去り、東京へ引き上げてしまったという経緯は、離台の直前に台湾博物学会の席上で彼が行った講演からもよく窺える〔森 1913c〕。周囲から「多血性」と評されていたこの人物の面目躍如たるものがあるだろう⁸。

その森が再び台湾へ戻って来たのは意外に早かった。1年余りの後、1914年（大正3年）8月のことである。森はもう一度、臨時台湾旧慣調査会の囑託になった。今回はどうやら台湾原住民に関する自分の著書をそこから出版しようと目論んでいたようであり、実際、彼の主著である『台湾蕃族志 第一巻』〔1917〕と写真集『台湾蕃族図譜』〔第一巻・第二巻、1915、1918〕は臨時台湾旧慣調査会から刊行された。やがて、古巣の台湾総督府博物館にも勤務することになった。1915年（大正5年）に新館をオープンさせたこの施設が、死去の2年ほど前まで森の主たる所属先となったのである。

以上のように、明治40年代以降の森は台湾総督府やその関連機関と付かず離れずの微妙な関係を取り続けたが、その一方で、同じ時期に、彼は総督府や在台知識人たちから台湾原住民研究の最高権威と目されるようになった⁹。台湾統治の開始以来しばらくの間、第一人者と言われていたのは総督府官吏の伊能嘉矩（いのかみ、1867-1925）であった。その評価が次第に森丑之助の方に移り始めたのである〔笠原 1998b〕。権威者と称される人物が交代したという事実は、台湾原住民に関する民族分類法の推移を見てみればよく分かる（【表】「台湾原住民の分類・民族名称の変遷」を参照）。明治期に総督府が公認していたのは、伊能が『台湾蕃人事情』〔1900〕やその後の研究で示した九民族分類法であった。それに対して、森は伊能説を否定し、新たに自身の六民族分類を提唱した。例えば、「台湾蕃族の種別に就て」〔1910〕という論考では、伊能の分類法を逐一検討し直す作業が行われている。また、大正期の初めに森が『日本百科大辞典』に執筆した「台湾蕃族」〔1912〕という項目は、彼の六民族分類法を簡潔に解説した原論的色彩が濃い。それまでの説と大きく異なるのは、伊能が「ツアリセン族」「プユマ族」「パイワン族」の3集団に区分した南部の住民を、森が「パイワン族」に一括した、という点である¹⁰。総督府はこの新しい見解に対して、なぜかもう1つ「サイセット（サイシャット）族」をそこに付け加え、七民族分類法を公式に採用した¹¹。そして、その分類法は以後も変更されることがなく、実にそれから日本の台湾統治が終わる1945年（昭和20年）まで生き続けたのである¹²。

興味深いのは、総督府からそのように権威扱いをされていた森丑之助の「理蕃政策」や「理蕃事業」に対する態度である。彼はいくつかの場所で、やや控えめな調子ながら、総督府批判とおぼしき発言をしている。とくに怒りを隠さなかったのは、佐久間左馬太総督の時代に強行された「五カ年計画理蕃事業」という名の武力行使によって、台湾原住民をめぐる情勢が著しく悪化したことに関してであった。1920年（大正9年）に若き日の佐藤春夫が台湾旅行をしたとき、森が親しく佐藤に語ったとされる言葉、すなわち「理蕃」への憤りや在台日本人の無知・無理解に関する慨嘆は、私的な会話の中で表明されたもので

台湾原住民の分類及び民族名称の変遷一覧

分類者	伊能/粟野	鳥居龍蔵	蕃務本署	森丑之助	蕃社戸口	蕃族調査	蕃族慣習
年代	1900	1910	1911	1912/1917	1913	1913-1920	1915-1922
族別	アタイヤル	タイヤル	Taiyal	タイヤル	タイヤル	太玄タイヤル 紗績セザク	たいやる
	—	—	Saisett	—	サイセツト	獅設	さいせつと
	ヴォヌム	ブヌン	Bunun	ブヌン	—	武審	—
	ツオオ	新高(ニイタカ)	Tsuou	ツォウ	ツォウ	曹	そう
	ツアリセン	—	Tsarisen	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—
	スパヨワン	バイワン	Paiwan	バイワン	バイワン	排灣	ばいわぬ
	プユマ	ピウマ (卑南ピラム)	Piyuma	—	—	卑南	—
	アミス	阿眉(アミ)	Ami	アミ	アミ	阿眉	あみす
	—	ヤミ (グルグル・セラ)	Yami	ヤミ	—	—	—
	—	サウ	—	—	—	—	—
ペイボ族(以下省略)							

分類者	系統所属	原語伝説	鹿野忠雄	KMD	台北市	一般
年代	1935	1935	1941	1945-	1997-	1998-
族別	アタヤル	アタヤル セテック	タイヤル亜族 セデック亜族	泰雅	泰雅 賽徳克	泰雅 太魯閣
	サイシャット	サイシャット	サイセツト	賽夏	賽夏	賽夏
	ブヌン	ブヌン	ブヌン	布農	布農	布農
	ツォウ	カナカナブ サアロア	北ツワウ亜族 南ツワウ亜族	曹	邵	邵
	—	—	—	—	—	—
	ルカイ	ルカイ	—	魯凱	魯凱	魯凱
	バイワン	バイワン	バイワン亜族 ルカイ亜族 スカロカロ亜族	排灣	排灣	排灣
	パナパナヤン	プユマ	ピウマ	卑南	卑南	卑南
	パングツァハ	アミ	アミ	阿美	阿美	阿美
	ヤミ	ヤミ	ヤミ	雅美	達悟	達悟
	—	—	—	—	邵	邵

資料出典：伊能嘉矩、粟野傳之丞 1900『台湾蕃人事情』台湾総督府民政部文書課：台北，283pp
 鳥居龍蔵 1910『人類学研究・台湾の原住民(一)序論』鳥居龍蔵全集 5：4-13、1976、朝日新聞社：東京
 Government of Formosa 1911, "Report on the Control of the Aborigines in Formosa", Bureau of Aboriginal Affairs, Taihoku.
 森丑之助 1912『台湾蕃族』『日本百科大辞典』6巻、三省堂：東京
 1917『台湾蕃族志』1巻、臨時台湾旧慣調査会
 台湾総督府 1913『蕃社戸口』
 佐山敏吉 1913-21『蕃族調査報告書』臨時台湾旧慣調査会・台湾総督府臨時台湾旧慣調査会：台北
 小島由道他 1915-22『蕃族慣習調査報告書』臨時台湾旧慣調査会・台湾総督府臨時台湾旧慣調査会：台北
 移川子之藏・宮本延人・馬淵東一 1935『台湾高砂族系統所属の研究』台北帝国大学土俗人種学研究室
 台北帝国大学言語学研究室 1935『原語による台湾高砂族伝説集』刀江書院：東京
 鹿野忠雄 1941『台湾原住民分類に対する一試案』『民族学研究』7(1)：1-32(亜族以下を略す)
 KMD：中華民国国民党政府に属す公的な省県郷役所など
 台北市：台北市政府に属す原住民事務委員会による
 一般：学界および民間の新聞雑誌などで一般に用いられている分類

【表】 台湾原住民の分類・民族名称の変遷

陳文玲小姐作成 [2001]。森の分類にサイシャットが含まれず、六民族分類になっている所に注意。

あるだけに、彼の率直な心情吐露と受けとめてよいのかもしれない（「付論3」を参照）。長年の調査を通じて、森は台湾原住民の慣習やものの考え方に通曉し、この異国の人々に共感すら抱いていたらしい。言うまでもなく、当時の日本人の中では稀有な存在であった。有名な講演録「台湾蕃族に就て」[1913c]から次のような発言を拾い上げただけでも、彼の台湾原住民観についてその一端を知ることができるであろう。すなわち、

「若し蕃人にして充分の理屈も分り意味も分りますれば、彼等の上には蕃の字は既に無いのであります。」

「彼等の言葉の中には、帰順とか服従とかいふ定まった所の熟語さへないのであります。」

「彼等野蛮人のうちにも、一種崇高なる品性を有して居りまして、中には文明を以て誇れる開化人を羞殺せしむるものがあります。」¹³

森は総督府による台湾原住民支配を不可避の現実として受け入れながら、その実態をありのまま肯定する気にはならなかったのであろう。ほとんど独力で調査研究を進めてきた彼の周囲には、屈折した想いを共有できる相手がほとんど見当たらなかったのにちがいない。そのような人物にとって、台北を中心とする在台日本人の社会は決して居心地の良い空間ではなかったはずである。

馬淵東一は、森丑之助が「不羈奔放な性格」だったと述べている[1954b:91]。1928年（昭和3年）に初めて台湾に渡った馬淵は森とは直接の面識がなかったから、集団行動や組織に背を向けがちなその気質について間接的に聞き及んだのであろう¹⁴。博物館の同僚も似たような森の人物像を語っている。後年の座談会の席でその出席者たちは、例えば、「（素木得一）当時誰も蕃界等に行つて、えらい目に遭ふのを嫌がる時代に、山の中に居つて出張命令で出たが最後、何処に居るか判らない。之が役人として方々の役所に迷惑を及ぼしたらしい。（尾崎秀眞）二年位不明だった事があつた」[台湾総督府博物館（編）1939:390]などという回顧談を披露しているのである。もっと身近にいた友人の証言も付け加えておこう。宮川次郎によれば、台北で暮らしていた頃の森は、「千五百円の金を一箇月で蕩尽し、曙湯で十日間三助をやって人を驚かせた」[1926:26]こともあつたという。型破りの「無頼派」を想わせるようなエピソードである。もともと官吏などには不向きで、組織や規律を敬遠するタイプの人柄であつたことはまちがいあるまい。

5. 業績、そして幻の業績

1923年（大正12年）9月1日、関東大震災発生。この巨大地震によって、森丑之助の膨大な台湾原住民関係資料や未刊原稿などはすべて焼失したと言われる。森は茫然自失の状態

になったことであろう。曾孫の森雅文氏によれば、その当時、東京の自宅は西麻布にあったはずだという。なぜ資料や原稿類が、台北ではなく、東京に置かれていたのか。家族や親しい人たちは被災しなかったのだろうか。詳しいことはほとんど分かっていない¹⁵。

その大震災の前に、森は雄大な出版の構想を立て、順番にそれを実現しようとしていた。『台湾蕃族志』の書名で台湾原住民の民族誌シリーズを10巻、『台湾蕃族図譜』と題して姉妹篇の写真集シリーズ10巻を編集して、それらを臨時台湾旧慣調査会から逐次刊行するという計画である。『台湾蕃族志 第一巻』[1917]の「凡例」を見ると、民族誌の第1巻目はタイヤル篇で、以下ブヌン、ツォウ、パイワン、アミ、ヤミ、平埔と続き、第8巻目からは形質人類学、考古学、そして言語および総索引にあてる予定であったようだ。また、写真集の方もそれらに対応して構想されていた。『台湾蕃族図譜』[1915、改訂版1918]第一巻の「例言」によれば、第1、2巻には台湾原住民の容貌・体質・生活状態を示す写真、第3～5巻は土俗、第6巻は平埔、そして第7～10巻には形質人類学に資するための写真を身体計測の数値とともに収録する、という編集方針を立てているという。まさしく森の研究の集大成と言うべき構想である。

関東地方を襲った天災は、彼の生涯を賭けたこの計画を無惨にも打ち砕いてしまった。それ以前に出版されていた3冊だけが、かろうじて災難を免れたことになる。以下、後世に残された著作を少しだけ見ておこう。

『台湾蕃族志 第一巻』はタイヤルの民族誌で、この北部山地住民の概要、部族、村落、体質、社会組織、衣食住、信仰、伝説、首狩り、生業などを網羅した項目別の記述が大きな特徴である。そこに言語の項目が抜けているのは、台湾原住民の全言語を第10巻目にまとめて記載するつもりだったからであろう。ふつう日本の人類学者による民族誌というと、鳥居龍蔵が台湾ヤミの調査成果を記した『紅頭嶼土俗調査報告』[1902]を嚆矢と考えがちであるが、記述の精密さや完成度の点では、むしろこの森の著書を筆頭に挙げるべきかもしれない。ヤミ語をほとんど解さなかった鳥居は、民族誌の記載内容を「人の身体に直接に関係ある土俗」、すなわち生業の技術や物質文化などに限定せざるをえなかった[笠原 1998:64]。それに対して、タイヤル語に通じていた森は、それらを含めつつ、社会組織や信仰、伝承文化などに至るまで幅広い事象を記述することができた。包括的な民族誌としては、この『台湾蕃族志 第一巻』の方が内容面で充実しているのである。

『台湾蕃族図譜』には、第一巻に100点（タイヤル45、パイワン55点）、第二巻に100点（ブヌン28、ツォウ32、アミ20、ヤミ20点）の写真が収録されている。残念ながら、森が「生蕃」に含めなかったサイシャットについては1点も見当たらない。被写体になっているのは、山岳景観や集落から首棚、生活習俗、住居、衣服、人物などさまざまであり、日本人の統治がまだあまり浸透していなかった時代の台湾原住民世界がそこに活写されている。80年余りの年月がたった現在でも、しばしばそれらの写真が書籍その他に利用されているのは、誰もが認める高い資料価値のためだと考えてよい。同じ時期に台湾原住民を調

査した研究者の中でも、伊能嘉矩は自分が撮影した写真をほとんど残さなかった¹⁶。また、鳥居龍蔵は台湾調査で写真機を駆使したことが知られているが、一部を除いて自分では焼き付けたものを公表したことがなく、彼の撮影した写真は、没後かなりの年月を経てから後世の研究者たちの手で初めて日の目を見ることになった¹⁷。森丑之助だけが自力で写真集の出版に漕ぎつけたのである。

他の合計17冊分に相当する原稿や資料は悉く失われてしまったが、幸いなことに、大震災の前に雑誌や新聞に発表された論文、調査報告、随想などは、今でも復刻版やマイクロフィルムなどを利用すれば読むことができる（「付論1」を参照）。代表的なものに限って、いくつか紹介しておこう。

まず、比較的長篇と言えるのは『台湾時報』誌に10回にわたって連載された「ブヌン蕃地及蕃人」[1916-1917]で、総字数は7万字を越える。『台湾蕃族志 第一巻』のおよそ1/4程度の分量である。内容面でもこの論考はレベルが高く、別に発表した「台湾蕃族」[1914]も実質的にはブヌンを対象とした記述であるから、両者を併せて考えると、ブヌン民族誌についてはほぼ出版の準備が整っていたか、あるいは原稿が完成段階に至っていたと推測することができよう。もし『台湾蕃族志』のブヌン篇が出来上がっていたならば、それは研究書として、おそらくタイヤル篇の水準を上回る力作となったにちがいない。宮岡真央子[1997:130]が指摘している通り、この「ブヌン蕃地及蕃人」には、当時総督府の「理蕃」政策によって苦境に立たされていたブヌンの人々に対する、森の熱い想いが込められているように思われる。

もう1点、森の「著作目録」を見て気がつくのは、「北蕃の迷信」[1911-1912]、「パイワン族の迷信」[1913]という似通った表題の連載ものを書いていることである。その場合の「迷信」とは、今で言う呪術、信仰、祭祀、ト占、靈魂観、死生観、疾病観などを包摂する意味の広い概念であろう。森はそれぞれの民族集団ごとに行き当たりばったりの調査をしたのではなく、共通項目を設けて計画的に資料収集を行っていたことが、こうした連載稿から理解されてくる。すでに調査の段階で、民族誌シリーズを出版する意図が彼の念頭にあったのにちがいない。

森の研究者としての力量をよく示しているのは、やはり『台湾時報』誌に13回連載された「蕃俗百話」[1915-1918]である。暦、餅、文字、水、火、酒といった合計27個の項目を取り上げて、タイヤル、ブヌン、パイワン、アミ、ツォウと、各民族集団の持つそれぞれの慣習や物質文化、語彙などを比較考証したこの随筆風論文は、台湾原住民の日常生活を多面的に描いた一種の文化誌と呼ぶこともできる。分量は全部で8万字に近く、これに写真や図を付け加えれば、立派に独立した単行本となるだけの中味である。森の観察の正確さ、実地体験の深さが随所に滲み出ており、秀逸な作品と評せよう。

森が台湾原住民の居住地を歩き回った時期、とくにその最初の頃は、まだ総督府の統治体制も弱々しく、それぞれの集団が自律性に富んだ社会空間を維持していた。その時代に、

「理蕃政策」を背負ったわけではなく、また猟官や栄達とも無縁なところで、彼は情熱のおもむくままに台湾の山の民と触れ合った。大げさな言い方をすれば、近代の日本人として稀有な体験をしたことになるだろう。そのような人物だったからこそ、まったく武器などを携えず自由に山地を踏査することが可能だったと思えるのである。

しかし、1910年（明治43年）前後から、明らかに状況は変化した。武力制圧を伴う総督府の支配は着実に進展し、場所によっては日本人に対する敵意が増幅されるようになった。自律した古来の生活空間は、急速に、そして根底から掘り崩されていったのである。森は40歳台になって、早くも「古き良き時代」を回顧する心境になっていたようだ。来訪した佐藤春夫に語ろうとしたのも、そのような満ち足りた往時への追憶だったのかもしれない。

森の手元に残ったのは、若い時代の体験が刻み込まれた資料や写真などであった。そこには、再び見ることのできない台湾原住民の世界が、自身の記憶と共にしっかりと保存されていたのであろう。しかし、それらの貴重な記録は、巨大地震の災禍で灰燼に帰してしまった。台湾ではなく、遠い東京の地で、すべてが失われてしまったのである。森はそのとき満46歳であった。

6. 大正15年7月3日

台湾北端の基隆港と関西の神戸港を結ぶ定期船の航路。1926年（大正15年）7月3日、そこに就航する笠戸丸の船上から森丑之助は忽然と姿を消した（【記事】「森丑之助の死について報じる当時の台湾紙」を参照）。森の最期について判明しているのは、ただそれだけのことである。投身自殺説が囁かれた。偶然の事故という可能性も否定はできない。その前月に、森は台湾の別の場所で自ら生命を絶とうとして果たせなかった、という証言もある。仮にそれが本当であったならば、誰からも目撃されずに身を海中に投じてしまった公算が大きい。しかし、その後も自殺説を裏づけるような確証は得られることがなかった。謎は謎のまま残ってしまったのである。

遺書はなかった。失踪前の数年間についても不明なことが多い。はっきりしているのは、1924年（大正13年）に勤務先の台湾総督府博物館を退職し、以後は佐久間財団と大阪毎日新聞社から研究助成を受けていた、ということぐらいである。何か人間関係をめぐる軋轢があったのだろうか。関東大震災による研究資料の喪失が、いったいどの程度まで深く森の心を傷つけていたのであろうか。森の崇拜者だったらしい宮川次郎という人物によれば、その頃の森は、台湾総督府の圧力で追い詰められつつあったブヌンの一派を救済するために新村開拓の事業を考案し、それが挫折したことによって悲観的な心境に陥っていたという〔宮川 1926:18-20〕。もしその通りであったとすれば、気骨のある彼の精神が、結果としてその寿命を縮めてしまったことになる。

いずれにしても、明治20年代の終盤から始まった台湾原住民の研究は、ここに大きな区

正九は、森から十層の遺物... 森の死は、台湾の歴史に大きな影響を与えた。...

普通の第一人者 森丙牛氏の死

笠戸丸から大海原の
眞唯中へ躍入る

行方不明を告げられて... 森氏の死は、台湾の歴史に大きな影響を与えた。...

遺族... 森氏の死は、台湾の歴史に大きな影響を与えた。...

愛著... 森氏の死は、台湾の歴史に大きな影響を与えた。...

高市内に... 森氏の死は、台湾の歴史に大きな影響を与えた。...

本島人の火葬... 森氏の死は、台湾の歴史に大きな影響を与えた。...

高市内に... 森氏の死は、台湾の歴史に大きな影響を与えた。...



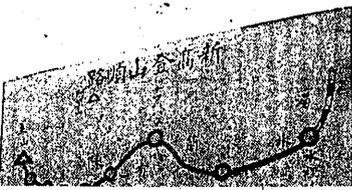
自叙した
森丙牛氏
高市内に... 森氏の死は、台湾の歴史に大きな影響を与えた。...

本島人の火葬

本年六月迄に五人

高市内に... 森氏の死は、台湾の歴史に大きな影響を与えた。...

本島人の火葬... 森氏の死は、台湾の歴史に大きな影響を与えた。...



【記事】 森丑之助の死去について報じる当時の台湾紙

切りの時を迎えることになった。すでに台湾を離れていた伊能嘉矩は、森より僅かに早く、1925年（大正14年）に世を去っていた。森に多大な影響を与えた鳥居龍蔵は、何年も前から朝鮮半島、シベリアや中国大陸に研究のフィールドを移していた。そして、最後まで台湾にとどまった森も、とうとう失意のうちに研究の舞台から退場してしまったのである。

森丑之助がその生涯を閉じた大正15年は、12月になって昭和元年に変わった。台湾に台北帝国大学が開設され、新しい台湾原住民研究が始まったのは、それからおよそ2年後のことである。

7. おわりに

日本が台湾を統治した50年の間に、実にさまざまな日本人が台湾原住民に関心を寄せた。研究者、「理蕃」担当者、それに民間人など、記録を残した者だけでもその人数は決して少なくない¹⁸。しかし、それらの中で、台湾の全域を視野に収め、台湾原住民の世界に寄り添うようにして研究を進めた人物となると、該当する研究者はおのずと数が限られてくる。独断的な評価と受け止められるかもしれないが、ここで述べた森丑之助と、昭和期の

鹿野忠雄、馬淵東一が、まさにそのような特別の研究者と称されるべきであろう。

鹿野は、登山や動物地理学への関心から台湾原住民に接し、次第に中央山脈の一帯、紅頭嶼（蘭嶼）などで精力的な調査を行うようになった。そして、第二次大戦末に調査の目的で北ボルネオに赴いたまま、とうとう生きて故国に帰ることがなかったという人物である。また馬淵は、台湾原住民の研究を志して開設後の台北帝国大学に入学し、若い日々の大部分を調査研究に費やした。1988年（昭和63年）に世を去るまで、馬淵が台湾原住民研究の世界的権威であり続けたことはよく知られている。

これら3名の研究者にはいくつかの共通点があるように思われる。まず、かつて馬淵が森を評して使った形容を借りるとすれば、この3名はいずれも「不羈奔放」な気質の持ち主であった。例えば、いったん調査に出かけてしまうと予定の期間が過ぎてもなかなか戻って来ない、といったエピソードが等しく語られていることは、そのような気質を端的に表す事実として興味深い。そしてもう1つ、なぜかこの3名は、中部高地の住民であるブヌンに強い執着を持っていた。鹿野のブヌンに対する好感情は、彼が著した山岳文学の傑作『山と雲と蕃人と』[1941]の中で繰り返し表明されている。馬淵がブヌンの研究に不朽の業績を残したことは、人類学史の上であまりにも有名である。森もまた、台湾原住民の中でとくにこのブヌンを賞賛していた。それは、先述した「ブヌン蕃地及蕃人」[1916-1917]に、「ブヌン蕃の沈勇と義気」と題した一節を設けたことからよく窺えるであろう。「古武士」のような面影があるブヌンの人々に対して、彼は一種尊敬の念に近い気持を抱いていたものと考えられる。

本稿で描いてきたのは、「日本における文化人類学の先駆者」としての森丑之助であった。明治から大正期にかけて彼が書き残した台湾原住民関係の著書・論文などは、日本の人類学史において最も早く現れた研究業績の一つと言ってよい。しかし、遺憾極まりないことに、合計20巻と構想されていた彼の民族誌と写真集は、大部分が世に知られることなく、資料や原稿状態のまま焼失してしまった。今となっては、幸い出版されていたその一部を通して、雄大な構想の全容を想像するしかないのである。「もし」と考えても仕方のないことではあるが、もし予定通り全20巻が刊行されていたならば、おそらく上に述べた「日本における文化人類学の先駆者」という言い方から、「日本における」という部分は取り去られていたのにちがいない。

謝 辞

この森丑之助の研究を進めるにあたって、つねに私を励ましてくださったのは楊南郡先生です。楊先生からは、台湾の図書館に所蔵されている貴重な森の未刊報告文も提供していただきました。台湾には森の業績を高く評価する方々が何人かおられ、その中でも、宋文薰先生、劉斌雄先生、徐瀛洲先生、そして南天書局

の魏徳文先生にいろいろと研究上のご相談ができたことは幸いでした。

日本では、すでに森研究を発表している宮岡真央子さん、伊能嘉矩の研究で知られる江田明彦氏から古い雑誌や新聞に掲載された森の論文等を提供していただきました。また、関連資料の収集に際しては、長崎県立図書館、琉球大学図書館にもお世話になりました。

読みにくい森の論文コピーなどを丁寧にワープロ入力してくださったのは滝沢チエ子さんです。近い将来、『森丑之助著作集』（仮称）を出版するときに、入力していただいた資料を活用いたします。

そして、本研究を続けているとき、私の心を強く支えてくださったのは、森丑之助の曾孫にあたる畏友・森雅文氏でした。

上記の皆様にも、この場を拝借して厚く御礼を申し上げます。

蛇足になりますが、本稿を書きながら、ご生前の馬淵東一先生のことを何度も思い出しました。ここに描いた森丑之助は、いくらか「馬淵東一風」に着色されているかもしれません。ご批評を頂戴したいと思います。

註

¹日本では今でも「高砂族」という旧名称の方がなじみ深いかもしれない。現在の正式名称は「台湾原住民（インディアン）」である。本稿では森丑之助の時代に広くゆきわたっていた「蕃族」「蕃人」などの言葉を用いざるをえないが、もちろん、それらはあくまでも歴史的な文脈に依りて使われる。

²宮本延人 1954:83。戦前の台湾を知っていた研究者からは、これと同じような評価を聞くことが多い。

³森には、「文化人類学者」という範疇には収まり切らない幅広い関心があった。彼は探検家であり、また現代の学問区分で言えば、台湾の地理学、植物学、考古学、形質人類学などにもそれぞれ少なからず貢献した人物であるが、そうした多岐にわたる研究の全体像については、とりあえず楊氏の労作「学術探検家森丑之助」〔2000〕に譲りたい。楊氏の論考が日本語訳されることを切に望む次第である。

⁴後の著作を見ると、森は漢籍を読みこなす能力に秀でていたことが窺える。しかし、そうした素養が長崎時代に培われたのか、あるいはそれ以前から備わっていたのか、その辺のことははっきりしない。

⁵残された資料から確認できる限りでは、森の山地踏査は1915年（大正4年）が最後のようである（「年譜」を参照）。再び台北に住むようになってからは、以前の18年間ほど頻繁には山地へ行かなかつたものと推測される。なお、日本の台湾統治初期には、学術調査とは別に、総督府や陸軍などによる探検・情報収集活動が盛んに行われた〔小島麗

逸 1979、1980]。それらと森の山地踏査の関係は、今のところ全く明らかになっていない。

⁶森は1900年（明治33年）10月に、鳥居の紹介で東京人類学会に入会した。坪井正五郎とも書簡をやりとりする関係になった。また、以後の森は、現地調査と併行して、独力で人類学の文献を渉猟したようである。

⁷森が行ったのは、現在の言い方をすれば広域（extensive）調査である。当時はまだヨーロッパ・アメリカの人類学でも集約（intensive）調査という方法は確立していなかった。森が繰り返し同じ場所に通っていることから、彼の調査スタイルは、今日の研究者が実行している「反復調査」を先取りしていると言えるかもしれない。

⁸この一時的な離台前後における森の言動 [例えば、1913b、1913c など] は、彼の人となりを理解するためだけではなく、「植民地台湾」を舞台にした日本人と台湾原住民の関係全般を知る上でも、貴重な資料とすることができる。

⁹一般には「蕃通」と呼ばれていた。今日の「現地通」にも通じるあまり好ましくない言葉だと思われるが、さて、森はその通称をどう考えていたのだろうか。

¹⁰以前に詳しく論じたように [笠原 1997]、この森による分類は、結果として「ルカイーパイワン問題」とでも言うべき重要な研究テーマを封印することになった。彼が霧台方面のルカイ居住地をどこまで正確に調査したのか、疑問なしとしない。

¹¹この点については、馬淵東一 [1954a] および陳文玲 [2000] の論文を参照。森はその後も六民族分類という自身の見解を変えなかった。彼によれば、サイシャットは平埔族であるタオカスの一部にあたる。

¹²1913年（大正2年）に総督府蕃務本署が発行した『理蕃概要』の中で、「蕃族」と題された概説部分（1-26頁）は森が執筆したものである。しかし、奇妙なことに、その概説では台湾原住民がタイヤル、ブヌン、ツオオ、パイワン、アミ、ヤミの六集団とされ、サイセットはタオカスの一群と明記されているにもかかわらず、そこに挿入された色刷りの分布図には、サイセットを含めた七つの「種族」が堂々と示されている。森と総督府の間に見解の相違があり、その相違を調整しないまま発行されてしまったのであろう。もっと矛盾だらけなのは、それ以前に総督府が出版した英文の「理蕃報告書」 [1911] である。そこでは、まず冒頭に急拵えの追加文らしき断り書きがあり、伊能説に基づく九民族分類が述べられた後、それと併記する形で、（サイシャットを「平埔族」に含めたまま）台湾原住民を六民族に分けるという森の新しい見解が紹介されている。また、色刷地図や人口統計が伊能説を踏襲している一方で、おそらく森が多くを提供したのであろう、収録された写真に関しては、例えばブユマの男子集会所を「パイワンのクラブハウス」とするなど、本文と一致しないキャプションも付けられている。台湾原住民研究の最高権威が伊能から森へ移行した時期の混乱を物語る編集と言えるであろう。なお、この報告書を英訳したのは石井眞二である。森とも交遊があった人物で、山田仁史の論

文 [1998] によれば、その後には渡英し、有名なJ.G.フレイザーなどの人類学者から知遇を受けたという。

- ¹³別の所で、森は、台湾原住民が「ジャワ、マレーなどと比べて原始的状态にあり……、最も良い標本」であると指摘して、台湾を「人種博物館」や「標本室」などに喩えている [1913b:35-36]。博物館の活動に熱意を持っていた人物の言葉であるにしても、やはりその背景には大きな時代の制約を考えざるをえないのである。
- ¹⁴1920年（大正9年）頃、森は霧社方面まで（台北帝国大学教授になる前の）移川子之蔵に同行したことがある。馬淵は、移川との会話を通して森の人柄を知った可能性もあるが、それだけではなく、おそらく昭和期に入ってから森の「野人ぶり」は関係者の間で広く語り継がれていたものと考えられる。
- ¹⁵森丑之助は龍子夫人との間に一女をもうけた。その孫（ss）に当たるのが森雅文氏である。ただし、台湾原住民の調査研究と自分の家族を結びつけて記したような記録は、どこにも残していない。
- ¹⁶数年前に台北で出版された『伊能嘉矩所蔵台湾原住民写真集』 [日本順益台湾原住民研究会（編） 1999] は、伊能の「所蔵写真」を公開したものである。
- ¹⁷鳥居龍蔵写真資料研究会 [編] 1990。
- ¹⁸台湾原住民の研究史について、詳細は『台湾原住民研究概覧』 [日本順益台湾原住民研究会（編） 2001]、短い要約ならば拙稿 [笠原 1998a] を参照。

参照文献

Bureau of Aboriginal Affairs, Government of Formosa

1911 *Report on the Control of the Aborigines in Formosa*. Bureau of Aboriginal Affairs, Government of Formosa : Taihoku

陳文玲

2000 「エスニック・バウンダリーから「民族集団」を考える — 台湾先住民族サイシャットを事例として」 『日本台湾学会報』 2:46-57

2001 「台湾原住民の分類及び民族名称の変遷一覧」 『台湾原住民研究概覧 — 日本からの視点』 （日本順益台湾原住民研究会 [編]） 10、風響社：東京

伊能嘉矩／栗野伝之丞

1900 『臺灣蕃人事情』 283pp.、臺灣總督府民政部文書課：臺北 [復刻版：2000、草風館：東京]

鹿野忠雄

1941 『山と雲と蕃人と — 台湾高山紀行』 中央公論社 [復刻版：2002、438pp.、文遊社：東京]

笠原政治

- 1997 「幻の〈ツァリセン族〉 — 台湾原住民ルカイ研究史（その1）」『台湾原住民研究』2:21-60
- 1998a 「研究史の流れ — 文化人類学を中心に」『台湾原住民研究への招待』（日本順益台湾原住民研究会 [編]）29-50、風響社：東京
- 1998b 「伊能嘉矩の時代 — 台湾原住民初期研究史への測鉛」『台湾原住民研究』3:54-78

小島麗逸

- 1979 「日本帝国主義の台湾山地支配 — 対高山族調査史・その1」『台湾近現代史研究』2:5-29
- 1980 「日本帝国主義の台湾山地支配 — 対高山族調査史・その2」『台湾近現代史研究』3:5-22

馬淵東一

- 1954a 「高砂族の分類 — 学史的回顧」『民族学研究』18(1・2):1-11
- 1954b 「高砂族に関する社会人類学」『民族学研究』18(1・2):86-104

宮本延人

- 1954 「台湾民族学研究史概説」『民族学研究』18(1・2):41-48

宮岡真央子

- 1997a 「森丑之助の著作目録及び若干の解説」『台湾原住民研究』（日本順益台湾原住民研究会 [編]）2:189-199、風響社：東京
- 1997b 「野人の文化人類学 — 森丑之助の生涯と研究」『南方文化』24:123-137

宮川次郎

- 1926 「蕃通森丙午の死因」『臺灣・南支・南洋パンフレット』21:17-26、拓殖通信台北支社：台北

森丑之助

- 1910 「臺灣蕃族の種別に就て」『臺灣日日新報』1910.07.03-07.31
- 1911-1912 「北蕃の迷信」『臺灣時報』23:23-25、24:10-12、25:19-20、26:13-15、27:19-20、28:33-35、29:14-16、30:28-29、31:11-13、32:23-25、33:30-32、34:28-30、35:26-28、36:17-19
- 1913a 「パイワン族の迷信」『臺灣時報』42:21-23、43:15-17、44:7-9、45:29-30、51:36-39
- 1913b 「生蕃の臺灣に及ぼせる影響及び蕃族の學術的調査」『東洋時報』179:30-42
- 1913c 「臺灣蕃族に就て」『臺灣時報』47:6-13、49:15-27
- 1914 「臺灣蕃族」『東洋時報』186:17-28、188:37-41

- 1915 『臺灣蕃族圖譜』（第一卷、第二卷）200版+37pp.、臨時臺灣舊慣調查會：臺北
北 [1918年刊の復刻版：1994、南天書局：臺北]
- 1915-1918 「蕃俗百話」『臺灣時報』69:50-55、70:42-47、72:39-41、79:35-41、
81:29-34、84:16-20、85:18-21、87:14-18、88:26-28、91:35-41、97:18-22、
98:14-17、101:27-33
- 1916-1917 「ブヌン蕃地及蕃人」『臺灣時報』83:28-33、84:12-16、86:39-44、90:
25-30、92:21-27、93:21-27、95:32-37、96:10-14、98:22-27、99:20-26
- 1917 『臺灣蕃族志 第一卷』360+22pp.、臨時臺灣舊慣調查會：臺北 [復刻版：1979、
南天書局：臺北]
- 1924 「生蕃行脚」『臺灣時報』55:106-114、56:141-149、57:158-166、59:107-113、
62:144-151
- 森丑之助 [原著] (楊南郡 [譯註])
- 2000 『生蕃行脚 — 森丑之助的台灣探險 (台灣調查時代5)』662pp.、遠流出版：
台北
- 日本順益台灣原住民研究会 [編]
- 1998 『台灣原住民研究への招待』285pp.、風響社：東京
- 1999 『伊能嘉矩所藏台灣原住民写真集』313pp.、順益台灣原住民博物館：台北
- 2001 『台灣原住民研究概覽 — 日本からの視点』430pp.、風響社：東京
- 臺灣總督府博物館 [編]
- 1939 『創立三十年記念論文集』422pp.、臺灣博物館協會：臺北
- 臺灣總督府民政部蕃務本署 [編]
- 1913 『理蕃概要』112pp.、臺灣總督府民政部蕃務本署：臺北
- 鳥居龍藏
- 1900 「新高山地方に於ける過去及び現在の住民」『東京人類學會雜誌』15(170):
303-308 [再録：『鳥居龍藏全集』11:575-579、朝日新聞社：東京、1976]
- 鳥居龍藏写真資料研究会 [編]
- 1990 『東京大学総合研究資料館所蔵鳥居龍藏博士撮影写真資料カタログ』（全4
部）、東京大学総合研究資料館
- 山田仁史
- 1998 「石井眞二とJ・G・フレイザー — 台湾原住民研究とイギリス人類学の出会い 素描」『台湾原住民研究』3:230-245
- 楊南郡
- 2000 「學術探險家森丑之助」『生蕃行脚 — 森丑之助的台灣探險 (台灣調查時代5
)』（森丑之助 [原著] / 楊南郡 [譯註]）29-113、遠流出版：台北

森 丑 之 助 年 譜

西暦(和暦)	森 丑 之 助	関 連 事 項
1877年(明治10年) [満0歳]	1月16日、京都市五條室町に生まれる。	
1881年(明治14年) [満4歳]		[E.B.Tylor, <i>Anthropology</i> 刊行]
1885年(明治18年) [満8歳]		台湾が、福建省から分かれて台湾省となる。初代台湾巡撫に劉銘伝が就任。
1893年(明治26年) [満16歳]	(推定)この頃、長崎商業学校に入学。中国南方官話を学ぶ(在籍期間は不詳)。	
1894年(明治27年) [満17歳]		8月、日清戦争始まる。
1895年(明治28年) [満18歳]	9月、陸軍通訳として台湾へ渡る。 ・月、宜蘭駐在時に台湾原住民と接する。	4月、日清講和条約締結、台湾は日本に割譲。 6月、台湾総督府による始政式、初代台湾総督に樺山資紀。 11月、伊能嘉矩台湾へ。
1896年(明治29年) [満19歳]	1月、初めて原住民居住地(蕃地)に入る(タイヤル・大 杉 袋)。 6月-7月、大 杉 袋へ。 8月-12月、陸軍通訳として花蓮、新城、太魯閣方面へ。 ・月、東部を旅行中、鳥居龍蔵と出会う。 12月、大武山周辺のパイワンの村々を訪問。	4月、民間人の台湾渡航許可。 7月、伊能嘉矩、淡北方面で平埔族の調査開始。 8月-12月、鳥居龍蔵の第1回台湾調査(東海岸)。
1897年(明治30年) [満20歳]	2月、通訳として太魯閣、木瓜の村々へ。 8月、アミの居住地、奇萊里留社で舟祭をみる。	5月-11月、伊能嘉矩・栗野伝之丞、半年を越える台湾全島調査(「巡臺日乗」の調査)。 10月-12月、鳥居龍蔵の第2回台湾調査(紅頭嶼)。
1898年(明治31年) [満21歳]	4月、タイヤル調査(大 杉 袋)。 ・月、丹大方面を横断し、ブマンの村々へ。最初の中央山脈横断。 8月-9月、鳥居龍蔵とともに台東、恒春などを回り、ブユマ、パイワン、スカロ、マカタオなどを調べる。	2月、第4代総督として児玉源太郎が着任。民政局長は後藤新平(3月)。 7月-12月、鳥居龍蔵の第3回台湾調査(知本溪以南)。 [A.C.Haddon など、Torres 海峡の調査]
1899年(明治32年) [満22歳]	2月、タイヤル(屈尺、大豹)居住地から東海岸へ。 4月、花蓮から南澳、蘇澳へ。	

西暦（和暦）	森 丑 之 助	関 連 事 項
1900年（明治33年） 〔満23歳〕	鳥居龍蔵の第4回台湾調査（1-9月）に同行。 1月、2月、パイワン調査。3月、ツォウ、ブヌン調査。4月、新高山（玉山）登頂。5月、6月、タイヤル調査。7月、埔里方面で平埔、タイヤル、ブヌン調査。8月、9月、中央山脈横断、花蓮港周辺の調査。 10月、鳥居の紹介で東京人類学会に入会。	1月-9月、鳥居龍蔵第4回台湾調査。 3月、伊能嘉矩／栗野伝之丞『臺灣蕃人事情』刊行。 7月-9月、伊能嘉矩、台南一帯の調査（「南遊日乗」の調査）。
1901年（明治34年） 〔満24歳〕	1月、苗栗方面のタイヤル調査。 2月、南投方面のブヌン調査。 6月-7月、タイヤル調査。 ・月、単身で紅頭嶼へ赴き、ヤミの調査。 12月、南部のパイワン調査。	10月、臨時台湾旧慣調査会発足。
1902年（明治35年） 〔満25歳〕	1月-2月、新高山、郡大山方面のブヌン調査。 4月、阿里山経由で新高山登山。 6月、タイヤル調査（屈尺）。 ・月、徳文、内本鹿、台東のルートで中央山脈南部を横断。	7月、東京帝国大学より鳥居龍蔵『紅頭嶼土俗調査報告』刊行。
1903年（明治36年） 〔満26歳〕	2月、タイヤル調査（烏来）。 3月、大阪の第5回内国勸業博覧会に出陳する台湾森林地図を小西成章と共に作成。	3月-7月、大阪で第5回内国勸業博覧会開催。
1904年（明治37年） 〔満27歳〕	8月-9月、ブヌン、アミ、タロコ調査。 9月-10月、ブユマ、アミ、パイワン調査。 ・月、紅頭嶼調査。 ・月、八通関を経て、ブヌン居住地を横断。	2月、日露戦争始まる。
1905年（明治38年） 〔満28歳〕	3月-10月、南部でパイワン（ルカイ）の調査。 この時期から、台湾総督府殖産局の囑託として植物標本採集に加わる。	9月、日露講和条約調印。
1906年（明治39年） 〔満29歳〕	1月-2月、霧社方面のタイヤル調査。 3月、パイワン調査。 4月-6月、ブヌン、タイヤルの調査。 6月-7月、佐久間総督の中南部巡視に一部同行。 7月-8月、八通関ルートで中央山脈横断。 8月-9月、タイヤル調査。 11月-12月、新高山登頂、中央山脈横断。	1月、伊能嘉矩、台湾から帰省の途に就く。 4月、佐久間左馬太、第5代台湾総督として着任。 10月、鹿野忠雄出生。 〔A.R.Badcliffe-Brown、Andaman 諸島で調査開始〕
1907年（明治40年） 〔満30歳〕	1月、タイヤルを調査し、能高主山経由で中央山脈を横断。 4月、川上瀧彌と紅頭嶼へ。 7月-9月、タイヤル調査。 12月、宜蘭方面のタイヤル調査。	

西暦(和暦)	森 丑 之 助	関 連 事 項
1908年(明治41年) [満31歳]	1月、埔里、霧社から能高主山、中央山脈横断。 2月、南ツォウ、ブヌンの調査。 4月、臨時台湾旧慣調査会囑託(1910年=明治43年9月まで)。 5月、タイヤル調査(屈尺)。 10月、台湾総督府博物館・歴史部門の陳列員。 10月-11月、中央山脈中南部を横断、ツォウ、ブヌンの居住地へ。	4月、台湾縦貫鉄道、基隆・打狗間全通。 10月、台湾総督府殖産局博物館の開館(旧彩票局の施設を利用)。
1909年(明治42年) [満32歳]	3月-5月、タイヤル調査。 5月、パイワン調査。 5月、長女の富美、台北で出生。 8月、タイヤル調査(大内炭)。 11月-12月、阿里山へ測量と植物採集に。 1月、志田梅太郎と、関山を通り中央山脈横断。	1月、馬淵東一出生。 2月、臨時台湾旧慣調査会に蕃族科を増設。 10月、台湾総督府に蕃務本署設置。
1910年(明治43年) [満33歳]	1月、花蓮、新城方面へ。タイヤル、タロコ勢力と談判。 3月、埔里から合歡山へ。 4月、集集(南投)から中央山脈横断探検の一行に加わり(ブヌン調査、森林・地質等の調査)、拔仔庄、花蓮港(太魯閣調査)を経て台北へ。 5月、蕃務本署調査課囑託。 6月、台北で結婚・入籍(森龍子、21歳)。 9月、臨時台湾旧慣調査会囑託を辞す。 12月、鳥居龍蔵と共にタイヤル居住地へ。	5月、台湾総督府蕃務本署調査課の設置。 5月、「五ヵ年計画理蕃事業」(武力平定計画)開始(1914=13年まで)。 10月、韓国併合。 12月、台湾博物学会発足。 12月、鳥居龍蔵來台。
1911年(明治44年) [満34歳]	1月-3月、鳥居龍蔵とタイヤル調査。 6月、パイワン調査。 7月、宜蘭に漂着したバタン諸島・イトバヤット島民について身体計測などの調査をする。	
1912年(大正元年) [満35歳]	4月、ブヌン調査。 8月、『日本百科大辞典』(三省堂)に「臺灣蕃族」の項目。 10月、タイヤル調査。	
1913年(大正2年) [満36歳]	3月-4月、タイヤル調査。 6月、蕃務本署調査課の廃止により「内地」帰還を決意。 6月、台湾博物学会(台北)において講演。 6月、台湾から東京へ帰府。 7月-12月、東京で講演等の日々。	5月、坪井正五郎ロシアで客死。 6月、台湾総督府蕃務本署調査課の廃止。 この年から『蕃族調査報告書』刊行開始(全8冊)。
1914年(大正3年) [満37歳]	8月、再び台湾へ。臨時台湾旧慣調査会囑託(1915年=大正4年3月まで)。 10月-12月、花蓮方面でアミ、タイヤルの調査。	5月、太魯閣に「討伐隊」派遣。 10月、「南蕃」の銃器押収。 第一次世界大戦。10月、日本海軍がドイツ領南洋諸島を占領。

西暦(和暦)	森 丑 之 助	関 連 事 項
<p><この前後から1926年(大正15年)の死去までは記録が乏しく、動静に不明な所が多い。></p>		
1915年(大正4年) [満38歳]	1月、宜蘭から中央山脈を越え、タイヤル調査。 6月、「蕃俗百話」連載開始。 8月、日本海軍が占領した南洋(ミクロネシア)へ。 8-9月、『臺灣蕃族圖譜』(第一巻、第二巻)を刊行。	7月、西来庵事件。 8月、台湾総督府博物館新館の開館。 この年から『蕃族慣習調査報告書』刊行開始(実質全8冊)。 [B.K.Malinowski、New Guinea 東部の調査開始]
1916年(大正5年) [満39歳]	・月、台湾総督府博物館勤務。 8月、「ブヌン蕃地及蕃人」連載開始。	
1917年(大正6年) [満40歳]	3月、『臺灣蕃族志 第一巻』を刊行。	
1919年(大正8年) [満42歳]		1月、パリ講和会議、日本による南洋諸島の委任統治開始。
1920年(大正9年) [満43歳]	6-10月、佐藤春夫の台湾旅行。森丑之助がその旅行の「指南役」になる。 この頃、移川子之蔵の霧社方面旅行に同行。	6月-11月、サラマオ事件。
1923年(大正12年) [満46歳]	9月、関東大震災で貴重な資料や未刊原稿などをすべて焼失。	9月1日、関東大震災発生。
1924年(大正13年) [満47歳]	・月、総督府博物館を辞職。佐久間財団の研究助成を受け、また大阪毎日新聞社の囑託になる。	
1925年(大正14年) [満48歳]	6月、伊澤多喜男総督の視察に随行して、台湾全島を回る。	9月、伊能嘉矩死去(59歳)。
1926年(大正15年) [満49歳]	7月3日、失踪。基隆-神戸航路の定期船・笠戸丸から投身自殺をしたと言われる。	12月25日より昭和元年。

*森の著作、楊南郡の「森丑之助年譜」[2000]、その他から作成。(未完 — とくに、実地調査については記載を大幅に略している。)

森 丑 之 助 著 作 目 録

著書・論文等の名称	著者名	発行年月	同左西暦	発行所、雑誌、新聞等	備 考
(単行本・報告書・語彙集等)					
001. 阿眉蕃語集	森丑之助	明治42年 4月	1909.04	27pp. 臺灣總督府民政部蕃務 本署：臺北	
002. ばいわん蕃語集	森丑之助	明治42年 4月	1909.04	37pp. 臺灣總督府民政部蕃務 本署：臺北	
003. ふぬん蕃語集	森丑之助	明治42年 4月	1909.04	111pp. 臺灣總督府民政部蕃務 本署：臺北	
004. 太魯閣蕃語集	森丑之助	明治43年 5月	1911.05	臺灣總督府民政部蕃務 本署：臺北	未刊
005. 埔里社方面トルコ蕃語集	森丑之助	明治43年 5月	1911.05	臺灣總督府民政部蕃務 本署：臺北	未刊
006. (稿本) ブヌン族記事稿本	森丑之助	明治43年	1911	臺灣總督府民政部蕃務 本署蔵	未刊
007. (稿本) 集集・拔仔庄間中央山脈横 断探検報文(太魯閣蕃の過去及現在)	森丑之助	明治43年 4月	1910.04	162pp. 臺灣總督府民政長官提 出	未刊
008. 臺灣蕃人寫真帖	森丑之助	明治43年	1911	宮内省蔵	未刊
009. 臺灣山岳景觀解説	森丑之助 中井宗三	大正 2年11月	1913.11	9pp. 新高堂：臺北	
010. 臺灣蕃族圖譜	森丑之助	大正 4年 8月 9月	1915.08 .09	第一卷、第二卷 臨時臺灣舊慣調査會： 臺北	復刻、1994年(平 成6年)南天書局 ：臺北
011. 臺灣蕃族志 第一卷	森丑之助	大正 6年 3月	1917.03	260pp., 2maps, 20pls. 臨時臺灣舊慣調査會： 臺北	復刻、1979年(昭 和54年)・1996年 (平成8年)南天 書局：臺北

著書・論文等の名称	著者名	発行年月	同左西暦	発行所、雑誌、新聞等	備考
(論文・随想等)					
012. 南方蕃社に於ける人類學的研究旅行 (一) (二) (三) (四) (五) (六) (七)	森頼次郎	明治33年 4月 5月	1900.04 .05	臺灣日日新報 明治33年 4月25日～ 5月 3日	
013. 臺灣蕃地探検日記	森頼次郎	明治33年 6月	1900.06	東京人類學會雜誌 15(171):360-368	012 の転載
014. 北蕃行 (一) (二) (三) (四) (五) (六) (七)	森頼四郎	明治33年 6月	1900.06	臺灣日日新報 明治33年 6月 6日～ 6月13日	
015. アミ蕃族の言語に就て	森頼四郎	明治33年 6月	1900.06	臺灣日日新報 明治33年 6月13日～ 6月14日	
016. 臺北臺中之間にて石器時代遺物ある べき地	森頼次郎	明治33年11月	1900.11	東京人類學會雜誌 16(176):77	
017. 臺灣奇萊里留社の舟祭	森丑之助	明治34年 3月	1901.03	東京人類學會雜誌 16(180):207-212	
018. 臺灣通信	森丑之助	明治35年10月	1902.10	東京人類學會雜誌 18(199):38-41	
019. 臺灣に於ける石器時代遺物に就て	森丑之助	明治35年12月	1902.12	東京人類學會雜誌 18(201):89-95	
020. 中央山脈横断道路 (一) (二) (三) (四) (五) (六) (七) (八) (九) (十) (十一) (十二) (十三) (十四)	森丑之助	明治40年10月 11月	1907.10 .11	臺灣日日新報 明治40年10月22日～ 11月13日	
021. 中央山脈の森林 (一) (二) (三)	丙牛生	明治41年 2月	1908.02	臺灣日日新報 明治41年 2月 1日～ 2月 5日	
022. 中央山脈の地質 (上) (中) (下)	丙牛生	明治41年 2月	1908.02	臺灣日日新報 明治41年 2月 6日～ 2月 8日	
023. 岐葉の蕃人 (一) (二) (三) (四) (五) (六) (七) (八) (九) (十) (十一) (十二)	丙牛生	明治41年 2月	1908.02	臺灣日日新報 明治41年 2月11日～ 2月28日	
024. 首取懺悔	丙牛生	明治41年 5月	1908.05	臺灣日日新報 明治41年 5月 3日	
025. 鹿場大山探險談 (一) (二) (三) (四) (五) (六)	森丙牛	明治41年11月	1908.11	臺灣日日新報 明治41年11月	
026. 奥の奥の蕃社より	森丙牛	明治41年12月	1908.12	臺灣日日新報 明治41年12月26日	

著書・論文等の名称	著者名	発行年月	同左西暦	発行所、雑誌、新聞等	備考
027. 南中央山脈探検(一)(二)(三)(四)(五)(六)(七)(八)(九)(十)(十一)(十二)(十三)(十四)(十五)(十六)(十七)(十八)(十九)	森丙牛	明治42年 1月 2月	1909.01 .02	臺灣日日新報 明治42年 1月 7日～ 2月 4日	
028. 北蕃のお伽噺(一)(二)(三)(四)(五)(六)(七)	丙牛生	明治42年 5月	1909.05	臺灣日日新報 明治42年 5月16日～ 5月30日	
029. 南澳蕃の警樓	丙牛生	明治42年 6月	1909.06	臺灣日日新報 明治42年 6月13日	
030. 臺灣跡面蕃のお伽噺	森丑之助	明治42年 7月 8月	1909 .07 .08	東京人類學會雜誌 24(280):389-396, 24(281):440-443	028 に対応
031. 臺灣舊慣調査會の蕃人調査	森丑之助	明治42年 9月	1909.09	東京人類學會雜誌 24(282):493	
032. 北蕃	森丑之助	明治42年 大正 2年	1909 1913	愛國婦人	
033. 蕃人の製鹽	無署名	明治43年 7月	1910.07	臺灣時報 13:16-18	036 の記載から森 の執筆と確認
034. 蕃社地名考(一)(二)(三)	森丑之助	明治43年 7月 9月 明治44年 8月	1910 .07 .09 1911.08	臺灣時報 13:35-37 15:29-32 25:20-21	
035. 臺灣蕃族の種別に就て(一)(二)(三)(四)(五)(六)(七)(八)	森丙牛	明治43年 7月	1910.07	臺灣日日新報 明治43年 7月 3日～ 7月31日	
036. 蕃人の鹽と云ふ言葉	UM	明治43年 8月	1910.08	臺灣時報 14:7	
037. 人類學上より見たる北蕃の體質	森丑之助	明治43年 8月	1910.08	臺灣時報 14:20-21	
038. 臺灣の草(上)(中)(下)	丙牛生	明治43年 8月 9月 10月	1910 .08 .09 .10	臺灣時報 14:7-10 15:19-23 16:16-24	
039. 臺灣生蕃と熟蕃	森丑之助	明治43年11月	1910.11	臺灣時報 17:21-22	
040. ガオガン蕃人の體質	森丑之助	明治44年 1月	1911.01	東京人類學會雜誌 26(298):132-134	

著書・論文等の名称	著者名	発行年月	同左西暦	発行所、雑誌、新聞等	備考
041. 臺灣に於ける石器時代の遺跡に就て (上) (中) (下)	森丑之助	明治44年	1911	臺灣時報 19:17-19 20:7-10 21:23-25	
		2月	.02		
		3月	.03		
042. 過去に於ける北勢蕃	丙牛生	明治44年 5月	1911.05	臺灣時報 22:5-15	
043. 北蕃の迷信 (自序) (一) (二) (三) (四) (五) (六) (七) (八) (九) (十) (十一) (十二) (十三)	森丑之助	明治44年	1911	臺灣時報 23:23-25 24:10-12 25:18-20 26:13-15 27:19-20 28:33-35 29:14-16 30:28-29 31:11-13 32:23-25 33:30-32 34:28-30 35:26-28 36:17-19	
		6月	.06		
		7月	.07		
		8月	.08		
		9月	.09		
		11月	.11		
		12月	.12		
		大正元年 1月	1912.01		
		2月	.02		
		3月	.03		
		4月	.04		
		5月	.05		
		6月	.06		
7月	.07				
9月	.09				
044. イバヤツ島土人と臺灣蕃族	森丑之助	明治44年	1911	臺灣時報 24:4-10 28:30-33 29:11-14	
		7月	.07		
		12月	.12		
		明治45年 1月	1912.01		
045. 臺灣蕃族の調査に就て	丙牛生	明治45年 2月	1912.02	臺灣時報 30:11-14	
046. 蕃族標本の陳列に就て	丙牛生	明治45年 3月	1912.03	臺灣時報 31:3-6	
047. 十五年前の蕃界 (一) (二) (三) (四) (五) (六)	森丙牛	明治45年 5月	1912.05	臺灣日日新報 明治45年 5月 1日~ 5月 7日	
048. 北蕃の農業	森丑之助	明治45年 7月	1912.07	臺灣農事報 68:31-34	
049. 蕃人と其心性 (一) (二)	UM	大正元年	1912	臺灣時報 35:19-20 36:13-14	
		7月	.07		
		9月	.09		
050. 臺灣蕃族	森丑之助	大正元年 8月	1912.08	日本百科大辞典 6:734-737 三省堂:東京	
051. 臺灣蕃族概説	森丑之助	大正元年10月	1912.10	臺灣時報 37:11-16	050 の増補
052. 北蕃の農事に關する迷信	森丑之助	大正元年10月	1912.10	臺灣農事報 71:66-67	

著書・論文等の名称	著者名	発行年月	同左西暦	発行所、雑誌、新聞等	備考
053. 小學地理卷二・蕃人の插畫に就いて	森丑之助	大正元年11月	1912.11	臺灣教育 127:24-26	
054. 小學地理卷二・蕃人の插畫に就いて	森丑之助	大正元年12月	1912.12	臺灣博物學會會報 8:219-220	053の轉載
055. 紅頭嶼の蕃人	森丑之助	大正元年11月	1912.11	臺灣博物學會會報 7:160-164	
056. 中部臺灣に於ける民庄と蕃社の和親契約の實例	森丑之助	大正元年 11月 12月	1912 .11 .12	臺灣時報 38:12-15 39:14-17	
057. 「ブヌン」族の祭祀	森丑之助	大正2年1月	1913.01	蕃界 1:36-46	
058. タイヤル族の祭祀	森丑之助	大正2年3月	1913.03	蕃界 2:13-19	
059. 花蓮港と新城	丙牛生	大正2年 3月	1913 .03	臺灣時報 42:12-14	
060. バイワン族の迷信(一)(二)(三)(四)(五)	森丑之助	大正2年 3月 4月 5月 6月 12月	1913 .03 .04 .05 .06 .12	臺灣時報 42:21-23 43:15-17 44:7-9 45:29-30 51:36-39	
061. 新城の過去	丙牛生	大正2年4月	1913.04	臺灣時報 43:31-34	
062. 北蕃の迷信	森丙牛	大正2年5月	1913.05	蕃界 3:29-37	043の(一)(二)の再録
063. 蕃族	無署名	大正2年5月	1913.05	理蕃概要 (臺灣總督府蕃務本署 発行) 1-26	
064. 同治より光緒年間に於ける太魯閣蕃の勢力(上)(中)(下)	丙牛生	大正2年 5月 6月 11月	1913 .05 .06 .11	臺灣時報 44:2-4 45:25-27 50:36-40	
065. 生蕃の臺灣に及ぼせる影響及び蕃族の學術的調査	森丑之助	大正2年8月	1913.08	東洋時報 179:30-42	
066. 臺灣蕃族に就て(上)(下)	森丑之助	大正2年 8月 10月	1913 .08 .10	臺灣時報 47:6-13 49:15-27	
067. 有史以前の臺灣住民に就て	森丑之助	大正2年9月	1913.09	東洋時報 180:33-42	

著書・論文等の名称	著者名	発行年月	同左西暦	発行所、雑誌、新聞等	備考
068. 臺灣蕃族に就いて	森丑之助	大正 2年10月	1913.10	臺灣博物學會會報 12:129-155	066 と同じ講演の速記録
069. 臺灣蕃族に就いて	森丑之助	大正 2年 10月 11月	1913 .10 .11	臺灣教育 138:13-32 139:3-18	066 と同じ講演の速記録
070. 生蕃の觀たる臺灣及其の郷土に對する感念	森丑之助	大正 2年11月	1913.11	東洋時報 182:21-28	
071. 生蕃の首狩に對する感念と其慣習	森丑之助	大正 2年12月	1913.12	東洋時報 183:25-35	
072. ブヌ族の傳説	丙牛生	大正 3年 1月	1914.01	臺灣時報 52:29-32	
073. 生蕃の傳説(一)(二)	森丑之助	大正 3年 1月 2月	1914 .01 .02	東洋時報 184:30-40 185:39-44	
074. ツオウ族の傳説	丙牛生	大正 3年 2月	1914.02	臺灣時報 53:37-40	
075. 臺灣の生蕃に就て	森丑之助	大正 3年 2月	1914.02	人類學雜誌 29(2):54-60	
076. 不具者の淘汰	森	大正 3年 2月	1914.02	人類學雜誌 29(2):85	
077. 生蕃と副乳	森	大正 3年 3月	1914.03	人類學雜誌 29(3):129-130	
078. 臺灣蕃族(一)(二)	森丑之助	大正 3年 3月 5月	1914 .03 .05	東洋時報 186:17-28 188:37-41	
079. 臺灣生蕃の山中生活	森丑之助	大正 3年 4月	1914.04	人類學雜誌 29(4):146-153	
080. 阿眉種族の現状	森	大正 3年 4月	1914.04	人類學雜誌 29(4):161-163	
081. 臺灣と漂着船	森	大正 3年 4月	1914.04	人類學雜誌 29(4):164	
082. 臺灣生蕃の記事に就て	森丑之助	大正 3年 5月	1914.05	人類學雜誌 29(5):202-206	
083. 生蕃中の漢人と其雜種	森	大正 3年 6月	1914.06	人類學雜誌 29(6):245-248	
084. 臺灣に於ける各蕃族の埋葬法に就て	森丑之助	大正 3年 7月 9月	1914 .07 .09	人類學雜誌 29(7):253-263 29(9):344-360	

著書・論文等の名称	著者名	発行年月	同左西暦	発行所、雑誌、新聞等	備考
085. 臺灣蕃族の靈地 (口繪説明)	森	大正 3年 7月	1914.07	人類學雜誌 29(7):287-288	
086. 粟の種を奪ひ來る (パイワン族の傳説)	森	大正 3年 8月	1914.08	人類學雜誌 29(8):332-333	
087. 熊と豹の話 (臺灣蕃人パイワン族の傳説)	森	大正 3年10月	1914.10	人類學雜誌 29(10):417	
088. 穿山甲と猿 (臺灣パイワン族の傳説)	森	大正 3年12月	1914.12	人類學雜誌 29(12):497	
089. 犬の媒に結婚 (臺灣パイワン族の傳説)	森	大正 4年 1月	1915.01	人類學雜誌 30(1):30-31	
090. リキリキ社 (臺灣パイワン族) の傳説	森	大正 4年 2月	1915.02	人類學雜誌 30(2):72	
091. 蕃人の農業	森丑之助	大正 4年 3月	1915.03	臺灣農事報 100	
092. 蕃人の主食物	森丑之助	大正 4年 6月	1915.06	臺灣農事報 103:86-96	
093. 紅頭嶼の蕃民 (其一) (其二)	森丑之助	大正 4年 6月 7月	1915 .06 .07	臺灣時報 69:35-38 70:31-37	
094. 蕃俗百話	丙午生	大正 4年 6月 7月 9月 大正 5年 4月 6月 9月 10月 12月 大正 6年 1月 4月 10月 11月 大正 7年 2月	1915 .06 .07 .09 1916.04 .06 .09 .10 .12 1917.01 .04 .10 .11 1918.02	臺灣時報 69:50-55 70:42-47 72:39-41 79:35-41 81:29-34 84:16-20 85:18-21 87:14-18 88:26-28 91:35-41 97:18-22 98:14-17 101:27-33	
095. 鈴村氏の琉球辨を讀む	森丙午	大正 4年 9月	1915.09	臺灣時報 72:19-30	
096. 卑南社の祖先 (臺灣蕃族の傳説)	森	大正 5年 1月	1916.01	人類學雜誌 31(1):31-32	
097. アンガウル島の燐礦 (上) (中) (下)	森丑之助	大正 5年 4月 5月 6月	1916 .04 .05 .06	臺灣時報 79:26-30 80:73-80 81:21-27	

著書・論文等の名称	著者名	発行年月	同左西暦	発行所、雑誌、新聞等	備考
098. ブヌン蕃地及蕃人 (一) (二) (三) (四) (五) (六) (七) (八) (九) (十)	森丑之助	大正 5年	1916	臺灣時報	(五) から「ブヌン蕃地及其蕃人」
		8月	.08	83:28-33	
		9月	.09	84:12-16	
		11月	.11	86:39-44	
		大正 6年 3月	1917.03	90:25-30	
		5月	.05	92:21-27	
		6月	.06	93:21-27	
		8月	.08	95:32-37	
		9月	.09	96:10-14	
		11月	.11	98:22-27	
		12月	.12	99:20-26	
099. 土器に因むパイワン族神話の一例	丙	大正 5年 9月	1916.09	臺灣時報 84:20	
100. 臺灣森林と蕃人との關係に就て	森丑之助	大正 6年 2月	1917.02	臺灣時報 89:9-19	
101. 椰子及其栽培 (上) (中) (下)	丙牛生	大正 6年	1917	臺灣時報	
		5月	.05	92:30-35	
		6月	.06	93:39-46	
9月	.09	96:26-35			
102. 抜仔庄奥の森林に就て	森丑之助	大正 6年 7月	1917.07	臺灣時報 94:32-38	
103. 領臺當初の蕃界	丙牛生	大正 7年 6月	1918.06	新臺灣 36:18-27	
104. 南洋占領地の民族	森丑之助	大正 7年10月	1918.10	臺灣時報 109:26-30	
105. 我佛徒の迷：放漫生活を以て自ら得たりとし自己内省の貴ぶ可きを知らずと教へたる加藤智學師に問ふ	森丙牛	大正 9年 4月	1920.04	臺灣日日新報 大正 9年 4月15日	
106. 加藤智學師の東歸を送る	森丙牛	大正 9年 4月	1920.04	臺灣日日新報 大正 9年 4月21日	
107. 肉に亡ぶも靈に生きたいと云ふ人生觀を實現せる私の悪魔主義 (一) (二) (三) (四)	森丙牛	大正 9年 4月	1920.04	臺灣日日新報	
		5月	.05	大正 9年 4月30日～ 5月 3日	
108. ヤップ島情一斑 (一) (二) (三) (四)	丙牛生	大正10年 5月	1921.05	臺灣日日新報 大正10年 5月10日～ 5月17日	
109. 堯舜時代の如き平和郷紅頭嶼の蕃人	森丑之助	大正11年11月	1922.11	臺灣日日新報 大正11年11月16日	
110. 生蕃行脚 (一) (二) (三) (四) (五)	丙牛生	大正13年	1924	臺灣時報	
		4月	.04	55:106-114	
		5月	.05	56:141-149	
		6月	.06	57:158-166	
		8月	.08	59:107-113	
11月	.11	62:144-151			

著書・論文等の名称	著者名	発行年月	同左西暦	発行所、雑誌、新聞等	備考
111. 南方民族と古銅鼓の史的関係(上)	森丑之助	大正13年10月	1924.10	臺灣時報 61:147-154	(下)は未刊
112. 浪人氣質	丙牛生	大正13年	1924	實業之臺灣 16(10)	
113. 臺灣の生蕃問題	森丙牛	大正13年	1924	實業之臺灣 16(12)	
114. 臺日社説の蕃人に關する社説を讀みて敢て世人の謬相を解く	森丙牛	大正14年	1925	實業之臺灣 17(7)	
115. 巡轅雜觀(一)(二)	森生	大正14年	1925	實業之臺灣 17(7) 17(8)	
116. 蕃地開發の先決問題として蕃務法規制定の必要	森丙牛	大正14年	1925	實業之臺灣 17(8)	
117. 川上農學士と臺灣植物調査事業	森丙牛	大正14年	1925	實業之臺灣 17(9)	
118. 臺北博物館の思ひ出	丙牛生	大正14年 9月 12月	1925.09 12	實業之臺灣 17(9)-(12)	
119. 鹿場大山探検談	森	昭和 7年11月	1932.11	臺灣山岳 6:65-74	025 の轉載
120. 臺北博物館の思ひ出	森丙牛生	昭和11年 5月	1936.05	科學の臺灣 4(2):51-62	118 の轉載

*楊南郡 [2000]、吉原弥生 [1967]、宮岡真央子 [1997] の目録、江田明彦の提供資料、及び筆者の文献調査に基づいて作成した。

- 埃・班德勒
1988(民國77) 「在荒野中寻找「荒野」——人類學家森丑之助的離奇生死」『探險家在台灣』(劉克襄[策劃]) 119-129、自立晚報社：台北
- Bureau of Aboriginal Affairs, Government of Formosa
1911(明治44) *Report on the Control of the Aborigines in Formosa*. Bureau of Aboriginal Affairs, Government of Formosa : Taihoku
- 笠原政治
1997(平成09) 「幻の〈ツアリセン族〉——台湾原住民ルカイ研究史(その1)」『台湾原住民研究』2:21-60
1998(平成10) 「伊能嘉矩の時代——台湾原住民初期研究史への測鉛」『台湾原住民研究』3:54-78
- 小島麗逸
1980(昭和55) 「日本帝國主義の台湾山地支配——対高山族調査史・その2」『台湾近現代史研究』3:5-22
- 馬淵東一
1954(昭和29) 「高砂族の分類——学史的回顧」『民族学研究』18(1・2):1-11 [再録：『馬淵東一著作集』2:249-273、社会思想社：東京、1974(昭和49)]
1954(昭和29) 「高砂族に関する社会人類学」『民族学研究』18(1・2):86-104 [再録：『馬淵東一著作集』1:443-483、社会思想社：東京、1974(昭和49)]
- 松村生
1909(明治42) 「臺灣蕃語集の出版」『東京人類學會雜誌』24(281):449
- 宮川次郎
1926(大正15) 「蕃山の二大樂園地」『臺灣・南支・南洋パンフレット』16、拓殖通信社台北支社：台北
1926(大正15) 「蕃通森丙午の死因」『臺灣・南支・南洋パンフレット』21:17-26、拓殖通信社台北支社：台北
- 宮本延人
1954(昭和29) 「台湾民族学研究概説」『民族学研究』18(1・2):81-85
1985(昭和60) 『台湾の原住民族——回想・私の民族学調査』237pp.、六興出版：東京
- 宮本延人[口述](宋文薰/連照美[編譯])
1998(民國87) 『我的台灣紀行』215pp.、南天書局：台北
- 宮岡真央子
1997(平成09) 「森丑之助の著作目録及び若干の解説」『台湾原住民研究』2:189-199
1997(平成09) 「野人の文化人類学——森丑之助の生涯と研究」『南方文化』24:123-137
2001(平成13) 「森丑之助の研究」『台湾原住民研究概覧——日本からの視点』(日本順益台湾原住民研究会[編]) 27-30、風響社：東京
- 森丑之助
1979(民國68) 『臺灣蕃族志 第一卷』(臨時臺灣蕃慣調査會1917年刊の復刻版) 360+22pp.、南天書局：台北
1994(民國83) 『臺灣蕃族圖譜 第一卷 第二卷』(臨時臺灣蕃慣調査會1915年刊の復刻版) 200版+37pp.+中譯本(宋文薰[編譯])、南天書局：台北
- 森丑之助(楊南郡[譯註])
2000(民國89) 『生蕃行脚——森丑之助の台灣探險(台灣調查時代5)』662pp.、遠流出版：台北
- 中井宗三
1913(大正02) 「臺灣山岳景觀発刊に就て」『臺灣博物學會會報』11:111
- 岡本要八郎
1926(大正15) 「森丙午君と近藤技師」『臺灣博物學會會報』87:244-245

佐々木舜一

1926(大正15) 「森丑之助氏逝く」『臺灣博物學會會報』86:196-197

佐藤春夫

1998(平成10) 「霧社」『定本 佐藤春夫全集』5:119-138、臨川書店：京都

[1925(大正14)]

2000(平成12) 「詩文半世紀」『定本 佐藤春夫全集』18:5-124、臨川書店：京都

[1963(昭和38)]

臺灣總督府博物館 [編]

1939(昭和14) 『創立三十年記念論文集』422pp.、臺灣博物館協會：臺北

鳥居龍蔵

1900(明治33) 「新高山地方に於ける過去及び現在の住民」『東京人類學會雜誌』15(170):303-308 [再録：『鳥居龍蔵全集』11:575-579、朝日新聞社：東京、1976(昭和51)]

1901(明治34) 「台湾中央山脈の横断」『太陽』7(9・10・12・13) [再録：『鳥居龍蔵全集』11:431-459、朝日新聞社：東京、1976(昭和51)]

1910(明治43) 「森丑之助氏著、ふぬん蕃語集(臺灣總督府出版)」『東京人類學會雜誌』25(290):319-320

土田杏村

1932(昭和07) 「森丙牛氏の死」『思想、人物、時代』339-344、千倉書房：東京

山田仁史

1998(平成10) 「石井眞二とJ・G・フレイザー — 台湾原住民研究とイギリス人類学の出会い 素描」『台湾原住民研究』3:230-245

山路勝彦

1991(平成03) 「<無主の野蛮人>と人類学」『関西学院大学社会学部紀要』64:47-71

楊南郡

2000(民國89) 「學術探險家森丑之助」『生蕃行脚 — 森丑之助的台灣探險(台灣調查時代5)』(森丑之助 [原著] / 楊南郡 [譯註]) 29-113、遠流出版：台北

楊南郡 [編]

2000(民國89) 「森丑之助年譜」『生蕃行脚 — 森丑之助的台灣探險(台灣調查時代5)』(森丑之助 [原著] / 楊南郡 [譯註]) 601-638、遠流出版：台北

2000(民國89) 「森丑之助著作、論文目錄」『生蕃行脚 — 森丑之助的台灣探險(台灣調查時代5)』(森丑之助 [原著] / 楊南郡 [譯註]) 639-657、遠流出版：台北

2000(民國89) 「研究森丑之助事蹟與學術之參考文獻」『生蕃行脚 — 森丑之助的台灣探險(台灣調查時代5)』(森丑之助 [原著] / 楊南郡 [譯註]) 659-662、遠流出版：台北

執筆者不詳

1926(大正15) 「蕃通の第一人者森丙牛氏の死 — 笠戸丸から大海原の眞唯中へ躍入る」『臺灣日日新報』大正15年 7月31日

1926(大正15) 「森丑之助氏の遠逝」『東京人類學會雜誌』41(9):469

1936(昭和11) 「森丑之助 — 臺灣蕃族研究」『東亞先覺志士記傳』(黒龍會 [編]) 下:734、黒龍會出版部：東京(復刻、1966(昭和41)、原書房：東京)

(付論1)

森丑之助の著作を入手するには

現在、日本で森丑之助の著書、論文、調査報告、随想などを入手するのは容易なことではない。文献探しに慣れた台湾研究の専門家でもなければ、いくら研究機関や大型図書館に足を運んでも、読みたい文献に巡り会えないという場合が多いであろう。本研究では、文献の所在を意図的に調べたわけではないので、ここでは、個人的に知りえた範囲に限り、森の著作を入手する方法に関して最小限の情報を提供しておきたい。別掲の「森丑之助著作目録」に沿って述べることにしよう。

まず、単行本のうち2点が台湾で復刻されている。タイヤル民族誌『臺灣蕃族志 第一巻』と写真集『臺灣蕃族圖譜(全2巻)』である。どちらも復刻したのは台北の南天書局で、前者は1979年、後者は1994年に刊行。とくに、復刻版『臺灣蕃族圖譜(全2巻)』には宋文薰編譯の中文解説書が添付され、そこには宋文薰の編者序、例言のほか、附録として馬淵東一「高砂族の分類」の中文訳、**茂**逸夫「臺灣土著各族劃一命名擬議」、そして地図3点が収録されていて使い勝手が良い。この豪華箱入りの写真集は、1915年(大正4年)の初版ではなく、1918年(大正7年)の再版から復刻したようだ。なお、これら2点の復刻版は、日本でもごく一部の取次や古書店が扱っているが、入手するには時間と手間がかかる。直接、版元の南天書局に支払方法を含めて照会する方が簡便かもしれない(台北市羅斯福路三段283巷14弄14号1F)。

数種類の「蕃語集」を含めて、その他の単行本等は、一部を特定の大学や研究機関、団体、個人などが所蔵しているが、一般にはほとんど目に触れることがない。印刷されていない手稿本として、確認できた限りでは「集集・拔仔庄間中央山脈横斷探検報文」があり、これはいま台北の国立中央圖書館臺灣分館に所蔵されている。

なお、森丑之助の一部著作を中文に訳した楊南郡編『生蕃行脚』は台北の遠流出版公司から刊行されている。台湾では大型書店を中心に広く店頭に置かれているが、日本では台湾関係の出版物を取り扱っている書店などに注文するしかないようである。

森の論文、報告などが載っている雑誌のうち、『東京人類學雜誌』『人類學雜誌』は第一書房の復刻版があり、閲覧できる大学図書館や大型図書館が多い。しかし、かつて発行されていた雑誌となると、所蔵している図書館・団体などはかなり限られてくる。森がよく原稿を書いた『臺灣時報』、『東洋時報』は、たいていマイクロフィルムを利用することになるだろう。

『臺灣博物學會會報』は一部の大学図書館にある。マイクロフィルムになっているのかどうかは分からない。『蕃界』は台北の上記臺灣分館に所蔵されているが、日本国内にあるのかどうかは不明である。

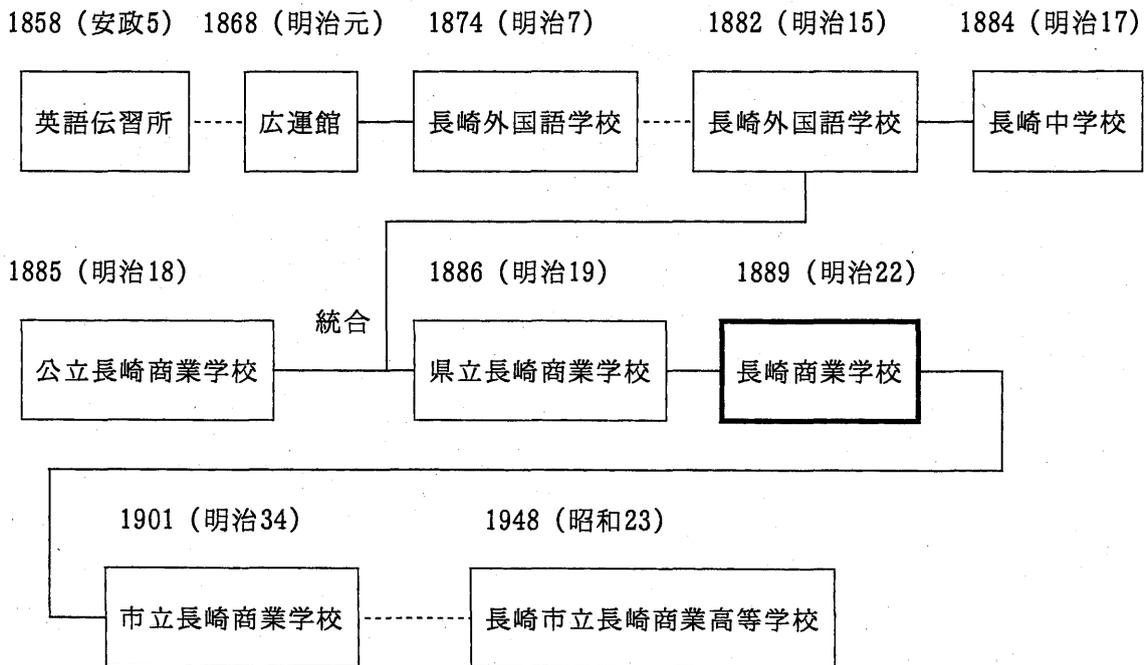
その他、かつて台湾で発行されていた雑誌『愛國婦人』『臺灣農時報』『新臺灣』『實業之臺灣』『科學の臺灣』などは、一部が台湾の研究機関にあるが、どれも稀覯雑誌であるらしく、まだ目にしたことがないと言う台湾の研究者も多い。まして日本における所在地となると、いまのところ皆目見当がつかない。『臺灣日日新報』紙はマイクロフィルム版が広く出回っている。

(付論2)

森丑之助の母校

台湾に渡る前、若い日の森丑之助は長崎商業学校で中国南方官話、当時の言い方で「支那南方官話」を学んだ。その頃、南方官話を教えていた学校は日本国内に数箇所しかなく、長崎がその1つであった。京都に生まれ、まだ10歳代半ばの森は、将来への志を抱いて中国大陸への「窓」と言われた長崎へ行ったのであろう。しかし、森がいったい何年に入学し、何年間そこに在籍したのかははっきりしない。渡台したのが1895年（明治28年）であるから、たぶん1893年（明治26年）か1894年（明治27年）頃の入学と推定することができるだろう。森は16歳か17歳であった。

森が学んだ長崎商業学校は、前身の1つが「長崎外国語学校」であり、明治期にめまぐるしく統合・移管・校名の変更を繰り返したようだ。『長崎商業百年史』[1985]によれば、その概略は下記の通りである。（--- は一部省略の意）



1882年（明治15年）に再び「長崎外国語学校」と校名を変更したときに、英語学部、清語学部の2部が設置されたという。ただし、1896年（明治29年）の項に「一時廃されていた清語科も再興し、英・清・朝・露学科の4外国語科が置かれた」と記されているので、森の在籍していた期間にはたして「清語学科」が存在したのかどうか、確かではない⁽¹⁾。

森の母校の後身、長崎市立長崎商業高等学校は、現在では長与町の高台に移転し、新しい校舎が立ち並んでいる【写真】。そこに、百年以上前に通った1学生の痕跡は、もはやない。

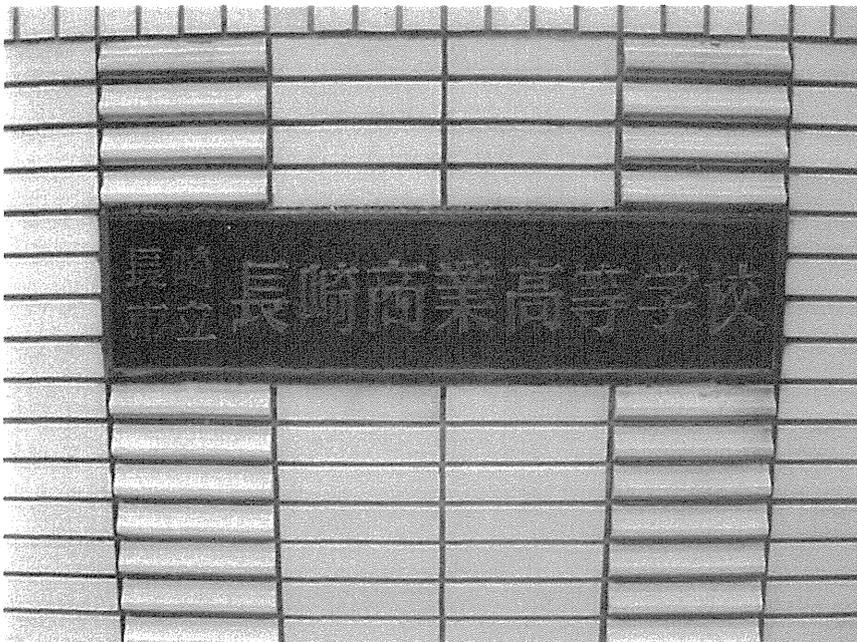
註

(1) 1889年（明治22年）に「長崎区」は「長崎市」となったが、校名は1901年（明治34年）まで「長崎商業学校」のままだった。森が在籍したのは、その校名の期間である。

参考文献

長崎市立長崎商業百年史編集委員会 [編]

1985 『長崎商業百年史』718pp.、長崎市立長崎商業高等学校：長崎



【写真】 現在の長崎県立長崎商業高等学校

(付論3)

佐藤春夫が描いた森丑之助

作家の佐藤春夫は、1920年（大正9年）に単身で台湾旅行に出かけた。28歳（数え年で29歳）のときである。『定本 佐藤春夫全集』〔全36巻＋別巻1、1998-2001 — 以下『定本』と略記する〕の「年譜・著作表」〔別巻1:263-386、2001、牛山百合子（編）〕には、

「（大正9年=1920年）6月下旬、東照市に誘われ〈台湾及び支那福建に旅行す〉／7月10日、台湾打狗⁽¹⁾ 湊町の歯科医院東照市方に滞在。21日、厦門に渡る。／10月15日、台北を出て〈帰来〉」〔同:284-285〕

とある。また、自身が別の所で、「台湾の旅行は六月半ばに出かけて九月のはじめに帰ったから完全に一夏であったが、そのうちの半月は対岸地方にいた」〔佐藤 1963（2000『定本』18:108）〕とも記していることから考えて、この年は、およそ100日間近く夏季の台湾に滞在したようである。

その台湾旅行の良き指南役になったのが、当時、台湾総督府博物館に勤務していた森丑之助（丙牛）であった。もともと佐藤が台湾を訪れたのは、高雄で歯科医を開業していた中学時代の旧友に誘われたからであり、その友人が台北で森を紹介したのだという。

後年、第二次大戦後の1963年（昭和38年）に発表した「詩文半世紀」の中で、佐藤は森との出会いを次のように回顧している。

「そうして台北では、当時そこの博物館長をしていた丙牛森丑之助を博物館に訪うて館内を見物するとともに⁽²⁾、友人はわたくしを森丙牛氏に紹介してくれた。

丙牛といえば、わたくしより二まわり上の丑歳でもあろうか。それくらいの年輩のもの柔らかに静かな中老紳士であったが、後に聞けば、日清戦争に、人の乏しかった南京官話の通訳として従軍し、戦後領台と同時にこの島に渡り、^{▽▽} 蛮人の研究を志し、言葉にふるさとの京なまりがあり、片足は不自由らしく跛行していたが、見かけによらない豪傑で、身に寸鉄をも帯びないで、^{▽▽} 蛮山を横行して、^{▽▽} 蛮人たちからは日本の酋長であろうと噂されているという人であった。その身は閑職にあったが、総督府内の古顔であったから、上司にはわたくしのために便宜をはかるよう頼んでくれるし、自分では島内の見るべき場所とその道順とを、スケジュールにつくってくれた。そのおかげで、わたくしは思いがけなくも総督府の客のような待遇をうけて、種々の便宜を与えられるところが多く、この島の名所旧跡の主なものに限らず見て歩くこともできた。全く幸福な一夏であった。

島内の見物のほかに、同じく丙牛先生のすすめで、友人の家の書生で厦門から来ていた青年の帰郷を案内者として、対岸地方（と台湾でいうのは、海峡の向こう福建省のこと）をも見ることができた。

<中略>

わたくしが後年、朝日新聞の囑によってマレー、ジャワへ従軍したのも台湾旅行中、丙牛先生から曾遊の南洋諸島の話聞いて興をそそられていたからであった⁽³⁾。支那事変はわたくしに朝鮮から北京へ行く機会を与え、また太平洋戦争はわたくしにジャワ島とバリとを周遊させた。戦争はそう言うのも憚りが多いが、この一人の旅びとには大いに幸するものであった。」〔佐藤 1963 (2000『定本』18:108-109)〕

この一節からも窺えるように、どうやら佐藤はこの年の台湾、廈門の旅行をはじめとして、後年の中国大陸や東南アジア旅行に至るまで、異国の地で過ごすことの醍醐味を森から教えられたものらしい。台湾の旅行については、「僕のこの旅行を通じての指導者であり保護者ともいふべき森丙牛先生」〔佐藤 1932 (2000『定本』27:72)〕とまで評しているのである。森が当時の総督府総務長官（民政長官）だった下村宏（文中ではよく「S民政長官」という略称が使われている）を紹介し、台湾旅行中の佐藤は、その下村の配慮によってつねに特別待遇を得ることができた。森の話に触発されて「蕃地」（原住民居住地）へ赴こうと決めたとき、早々と警察から旅行許可が与えられたのもそのためであった。

台風による道路の不通で当初の目的地・阿里山への旅行を断念した佐藤は、まず初めに台湾中部の景勝地である日月潭を訪れた。そのときの見聞は「旅びと」〔1924 (1998『定本』5:5-23)〕という作品に描かれている。

次に佐藤が足を伸ばしたのは「蕃界第一の都会」と称されていた霧社であった。おりしも霧社は、同年6月に霧社よりさらに山奥で起こった「サラマオ事件」（タイヤル住民による日本人警察官等の殺傷事件）による緊張が漲っており⁽⁴⁾、静かだった山里には日本の「討伐隊」が慌ただしく集結しつつあった。そうした訪問時の光景は、後に書かれた中編「霧社」〔1925 (1998『定本』5:119-138)〕に詳しい。そして、重要なのは、そこに「M氏」の略称で森が登場しているという点である。「霧社」という作品は、佐藤自身が「これは小説ではなく、紀行に反乱実録を加えたものである」〔1963 (2000『定本』18:108:)〕と解説しているように、フィクションではなく、見聞記または体験記と受け取るべきであろう⁽⁵⁾。

まず、霧社の宿で若いタイヤル（あるいはセデック）の女中と交わした以下のようなやり取りが描かれている。

「「ワタシ日本着物スキダ」

彼女は突然にそんなことを言った。それから机辺にあった「台湾蕃族誌第一卷」を見つけて、「ホン」と呼びながら彼女はそれを手にとって開いた。その巻頭にあった蕃族の写真数葉を見つけ出した。「バンジン、バンジン」と連呼しながら、不思議さうに幾度もそれを繰返してみた。それが彼女には意外に面白いものであったと見えて、その夜やや後刻になって彼女が手空になった時に、もうひとりどこからか彼女ほどの蕃女をつれて来て、この人にも先刻の本を見せてくれと頼んだ。彼女等は何か盛んに喋りながら打興じてそれを眺めてゐる。」〔佐藤 1925 (1998『定本』5:125)〕

台北で、佐藤は1917年（大正6年）に出版された森丑之助の著書『臺灣蕃族志 第一巻』を森から贈呈されたか、あるいは買い求めたようである。同書には台湾原住民12名の顔写真が掲載されており、それらが若い女性の興味をひいたのだろう。そして、佐藤は、霧社から台北に戻った後に森から聞いたという話をかなり長文で紹介している。すなわち、

「その後また三日ほどして予は台北に在った。さうして「台湾蕃族誌」の著者のもとに客となった。（この旅行に於て予はこの人に負ふところが最も多い。旅行日程はこの人の手によって作られたし、また予をS民政長官に介せされたのもこのM氏である。氏は隠れたる好学の士であると同時に探検的の实地踏査者で、この島の蕃山を氏ほど深く探った人はいないと言はれてゐるが、驚くべく敬ふべき事には氏はその踏査の間終始身には寸鉄をさへ帯びなかつたといふ事である。）氏に対して予は蕃地に於ての小見聞を述べて教を乞ふた。

<中略>

サラマオの事件に対しては氏は多く言はなかつた。たゞその起因は、十年の昔、佐久間総督が軍隊をして全島の蕃地を縦断的に強行軍を試みさせた時に遡らなければその真相を得ることは不可能である。佐久間閣下は理蕃に就て極力高圧的手段を惜しまなかつたが、M氏自身は当時から既にその可否を疑つてゐた。就中、その時のサラマオに対する所置は失政と難ずる人があるかも知れない。蕃状不穩を知つて、それがサラマオだと知つた時にはM氏はその一語で一大事を予想することが出来たといふ。M氏は更に、蕃人は蕃人自らはいつも一国を以て任じてゐる事実を挙げて、それ故、蕃人にとっては彼等の上に統治者があるといふ事實は容易には会得出来ないと云つた。予が霧社に於てサラマオからの分捕品を見たときと云ふと、M氏は不審げに、蕃人が事を起す時には既に十分に謀つて、婦女老幼の如きは山中に深く潜ませ、その衣類などの如きは悉く隠匿してゐる筈だと言つた。予はその衣類の縞柄などに就て仔細に述べるとM氏は言はれた — 蕃人は戦を開く前にはその敵から曾て平和時代に受けた贈物などを一纏めにしてそれを敵地の境へ投げ捨てて、恩を認めないことを表示して宣戦するのが習慣である。或は君の見た衣類はその種のもものが路傍に捨てられてあつたのではないだらうか。否か、ともかくも一般に蕃人の習慣などといふものは一切無視せられてゐるが為めに、それが原因をなして屢々彼等を怒らせたり、或は予知せらるべき事案をも気づかない事もある、と。また予は、彼地の蕃衣布に見るべきものが無かつた事を述べた時、その地方の蕃人の一般に手芸に秀でない種族である事と、それにまたそのやうな在来の蕃人固有の製作は無視せらるゝ事こそあつても、決して奨励せらるゝことがない為に衰微するのみで、早晚あとを絶つであらうといふことを予は教へられ、さうしてM氏は自家蒐集のその種の参考品を二点も予に与へられた。

或る日、市内に号外が発せられてそれによると、蕃地威圧の目的を以て派遣された飛行機の一機が蕃山のなかへ墜落した報知であつた。その次にはその機は破壊され飛

行士は首と男根とを切断された屍となって見出されたといふ号外にも接した。その時M氏は温雅な表情をやや憂鬱にして予に告げるには、一たい蕃人の人を殺すやその目的は決して殺人その事にあるのではなく、たゞ彼等是一種の宗教的迷信のために人の首を得たいのみであって、もし仮りに首さへ得られるならば命は残して行く位なものである。妊婦の腹を割いてみたり死人の男根を断つやうな彼等の宗教上に無意義な惨虐を楽しむやうな風習は、彼等の古来の習慣には少しも発見出来ない事実である。恐らくはかかる所業は彼等の祖先からの習ではなく、外来の或る種族から学んだところの新らしい蛮風であるらしい、云々。」〔佐藤 1925 (1998『定本』5:137-138)〕

もとより、これは佐藤の文章である。そのままのことを、森が実際に語ったと断言することはできない。しかし、森が著作や公的な場で表明したものはやや色合いが違う（かなり「本音」に近いと思われる）所見として、その台湾原住民観を理解する上で貴重な資料の1つになることであろう。

佐藤にとって、若い頃のこの台湾旅行は、後々まで好印象を持ち続けた体験だったようである。晩年になってからも、森への感謝の念をこめながら、次のように往事の旅を回顧している。

「最初の九州旅行の失敗と対照的に成功した旅行はその後約十年を経た台湾の旅行であつたらう。この地には中学時代の同級生の親しいのが移住してゐて一夏を家族同様に遇してもらへたうへに、当時の台北の博物館長丙牛森丑之助氏がわたくしのために旅行のプランを立ててくれたばかりではなく、官庁その他必要な筋へ依頼してわたくしの旅行上の便宜が得られるやうに取計らってくれたからわたくしは蕃山の奥まで探ることもできたし僅か百日ばかりの間にほとんど全島にわたってほぼ遺憾のない程この島を見ることができたばかりか、対岸の厦門にも遊んで詩囊は大に肥えた。さうして真に台湾を知るためにはジャワ、スマトラ、ボルネオなど南海の諸島を知らなければならぬといふ丙牛先生の意見が後年わたくしをして南方に従軍の機縁をつくつてゐたやうに思はれる。」〔佐藤 1958 (2000『定本』27:231)〕

「内地」へ帰ってから、おそらく佐藤春夫は森丑之助に礼状などの書簡を送ったものと想像される。二人の親密さが佐藤の文章からよく伝わってくるのである。しかし、書簡のようなものは、今のところ森の身辺からは見つかっていない。どこかに残っているのか。それとも、他の貴重や資料や原稿類とともに、1923年（大正12年）の関東大震災で焼失してしまったのであろうか。

註

- (1) 高雄のこと。
- (2) ここで「博物館長」とされているのは佐藤の誤解であるが、森がそう誤解されるほど該博な知識と威風堂々とした雰囲気とを備えていたとも読み取れよう。

- (3) 森は1915年（大正4年）の夏に、日本海軍が占領した南洋群島（ミクロネシア）へ赴き、帰台してから「南洋占領地の民族」〔森 1918〕その他の視察報告を書いている。
- (4) 『理蕃誌稿』第四卷に「「サラマオ」蕃騷擾事件」として次のように概略が記され、続けて事件の経過が具体的に述べられている〔原田倭（主編） 1932:621-630〕。
- 「臺中州能高郡管内ノ「サラマオ」蕃ハ東勢郡管内北勢蕃動搖ノ餘波ヲ受ケ蕃情日ニ悪化シ、六月下旬ニ至リ遂ニ其ノ鋒芒ヲ露シ將ニ「サラマオ」駐在所ニ殺到セントセシモ、應援隊ノ到着ニ依リ幸ニ事ナキヲ得、爾來嚴重警戒中ナリシカ、九月十八日兇蕃等ハ大舉シテ合流點分遣所及枋岡駐在所ヲ襲ヒ多數ノ警備員ヲ殺傷セリ。依テ此ノ方面ニ應援員ヲ派遣シ歸順蕃ヲ使用シ奇襲隊ヲ組織シ、兇蕃ノ巢窟ヲ衝キ蕃屋竝倉庫等ヲ焼棄シ、遠ク其ノ避難地ヲ蹂躪シ極力之ヲ追究シタルニ、十一月ニ至リ遂ニ歸順ヲ哀願スルニ至レリ。」〔同:621〕
- (5) 同じ箇所^{ママ}に佐藤は「霧社^{ママ}蛮の反乱に就いての見聞その他を記した」と書いているが、これは「サラマオ事件」に関する誤解か記憶違いと考えられる。

参照文献

原田倭（主編）

1932（昭和 7） 『理蕃誌稿』4、676pp.、臺灣總督府警務局：臺北

森丑之助

1917（大正 6） 『臺灣蕃族志 第一卷』260pp.、臨時臺灣舊慣調査會：臺北

1918（大正 7） 「南洋占領地の民族」『臺灣時報』109:26-30

佐藤春夫

1998（平成10） 「旅びと」『定本 佐藤春夫全集』5:5-23、臨川書店：京都

[1924（大正13）]

1998（平成10） 「霧社」『定本 佐藤春夫全集』5:119-138、臨川書店：京都

[1925（大正14）]

2000（平成12） 「詩文半世紀」『定本 佐藤春夫全集』18:5-124、臨川書店：京都

[1963（昭和38）]

2000（平成12） 「殖民地の旅」『定本 佐藤春夫全集』27:67-99、臨川書店：京都

[1932（昭和 7）]

2000（平成12） 「日本の風景」『定本 佐藤春夫全集』27:205-265、臨川書店：京都

(付論4)

楊南郡編譯『生蕃行脚』について

ここ数年来、台湾では森丑之助の名前が人口に膾炙し始めてきた。それまで台湾原住民に関心を寄せる少数の研究者などが「幻の先駆者」扱いをしてきたことを考えれば、実に大きな様変わりと言ってよい。森とその研究を世に知らしめた最大の功労者は、まちががなく楊南郡先生である。楊先生が『生蕃行脚』の書名で森の一部著作を中国語訳して出版したときに、多くの台湾の読者は、改めて森という過去の一日本人を「発見」したことになるだろう。同書はただの翻訳書ではない。周到な解説、註、写真、年譜、著作目録などを加えた、いわば「モリ・ワールド」とでも言える内容なのである。日本には、まだこの種の本は存在していない。一足も二足も早く、楊先生は森丑之助の研究に先鞭をつけたわけである。

楊南郡(ようなんぐん/ヤン・ナンジュン)先生は、1931年、日本統治時代の台湾台南県に生まれた。今では台湾山岳界を代表する登山家であり、ノンフィクション作家、山地古道や台湾原住民に詳しい在野研究者としても令名が高い。第二次大戦中に、楊先生は少年工として神奈川県高座の海軍工廠に派遣された。成長期に日本の教育を受け、日本語が堪能である。戦後、国立台湾大学で西洋文学を専攻。ノンフィクション作品で数々の文学賞に輝き、著述家として活躍する一方、40歳頃から台湾原住民に関する独自の研究に着手した。とくに注目されるのは、1990年代後半から日本統治時代の日本語による台湾原住民研究を次々と中国語に翻訳・出版した仕事であり、中でも「台湾調査時代」と題して日本統治初期の記録を編集・刊行した翻訳シリーズは、台湾の読書界に大きな反響を巻き起こした。「台湾調査時代」シリーズは、烏居龍蔵『探險台灣』、伊能嘉矩『平埔族調査旅行』、伊能嘉矩『台灣踏查日記(上)』、同『日記(下)』と続き、第5冊目に当たるのがこの森丑之助『生蕃行脚』である。

『生蕃行脚』は660頁を越える浩瀚な書物であるが、それでも収録できる文章には限りがある。楊先生が選んだのは、森の著作の中でも民族誌や史料紹介のような研究者好みの論考ではなく、むしろ探検・踏査の報告文、一般向けの講演録など、森の生きざまがよく伝わってくる文章だったようである。書名にもなった「生蕃行脚」[1924]は、まさに森の人物像を彷彿させる著作の代表的なものであろう。編集の段階で、楊先生は「生蕃」という言葉が読者に時代遅れの差別語と受け取られないか、ずいぶん心配しておられた。森の時代の言語感覚が70年以上の歳月を経て、徒な誤解を生まないとは言い切れないのである。しかし、結局はそれを書名とすることに落ち着いた。このような本を手にするほどの読者であれば、おそらく意図を取り違えることはあるまいという判断だったと思う。

同書に収録されているのは、その「生蕃行脚」のほかに、「(集集・抜仔庄間)中央山脈横断探検報文」[1910]、「生蕃の臺灣に及ぼせる影響及び蕃族の學術的調査」[1913]など、全部で10篇である。繰り返しになるが、これはただの翻訳ではない。各訳文、とくに探検・踏査の報告文に付された楊先生の註は詳細を極めており、その厳密な考証が同書の価値を一段と高めているのである。台湾の懐深い山地に精通した楊先生でなければ、これほどの注釈を施すことはできないであろう。そして、巻頭の解説、探検路線図、7点の附図、巻末の年譜、著作

目録など、研究書としての基本情報も充実している。とりわけ「學術探險家森丑之助」と題した巻頭の解説は80頁を越える力作であり、森の探検家、民族誌家という側面だけではなく、彼が同時に行った植物学や先史考古学の調査にも目配りが行き届いている。この解説だけで、1冊の単行本に相当するほどの内容を備えていると言えようか。

楊南郡譯註の『生蕃行脚』を日本の書店で買い求めるのはもちろん無理である。台湾の書籍を扱っている取次店などに依頼して、版元の遠流出版に注文するほかはない。もし楊先生の書かれたものを日本語で読みたいのであれば、森丑之助関係ではないが、最近増補再刊された鹿野忠雄の名著『山と雲と蕃人と』[2002]の中に、「鹿野忠雄とトタイ・ブテン」（柳本通彦訳）という一文が掲載されている。そのすぐ後の柳本通彦「台湾研究と楊南郡」も楊先生の仕事を理解する上で参考になるだろう。また、別冊宝島WT『台湾【興奮】読本』[1996]には、柳本氏が楊先生を取材した「山に登れば〈台湾〉が見えてくる」というインタビュー記事が載っている。そのインタビューからは、森丑之助を含めて、「台湾に魅了され、その自然や先住民の研究に半生を捧げた日本人研究者たち」の限らない情熱と、それらの日本人研究者たちに寄せた楊南郡先生の熱い想いが伝わってくるはずである。

参照文献

伊能嘉矩（楊南郡〔譯註〕）

1996（民國85） 『平埔族調査旅行 — 伊能嘉矩〈台灣通信〉選集（台灣調查時代2）』303pp.、遠流出版：台北

1996（民國85） 『台灣踏查日記〈上册〉（台灣調查時代3）』342pp.、遠流出版：台北

1996（民國85） 『台灣踏查日記〈下册〉（台灣調查時代4）』286pp.、遠流出版：台北

森丑之助（楊南郡〔譯註〕）

2000（民國89） 『生蕃行脚 — 森丑之助的台灣探險（台灣調查時代5）』662pp.、遠流出版：台北

鳥居龍藏（楊南郡〔譯註〕）

1996（民國85） 『探險台灣 — 鳥居龍藏的台灣人類學之旅（台灣調查時代1）』442pp.、遠流出版：台北

楊南郡（柳本通彦〔訳〕）

2002（平成14） 「鹿野忠雄とトタイ・ブテン — 早期台湾研究が結んだ友情」『山と雲と蕃人と — 台湾高山紀行』（鹿野忠雄〔著〕）403-426、文遊社：東京

楊南郡（柳本通彦〔取材・構成〕）

1996（平成8） 「山に登れば〈台湾〉が見えてくる」『別冊宝島WT 9 台湾【興奮】読本』192-201、宝島社：東京

柳本通彦

2002（平成14） 「台湾研究と楊南郡」『山と雲と蕃人と — 台湾高山紀行』（鹿野忠雄〔著〕）427-430、文遊社：東京

肉に亡ぶも靈に生きたい

と云ふ人生観を実現せる

私の悪魔主義 (大正九年四月二十八日)

森 丙午(寄)

現代に於ける世界的風潮を大観いたしますれば、悪魔主義の思想が非常なる勢を以て、正義、人道を蹂躪し遂には国家生活の大より、小にしては個人生活の上にも、絶大なる暴威を逞ふして居り、之が為に全世界の人民が、国際的にも、政治的にも、経済的にも圧迫されつゝありて、有ゆる方面に種々なる問題となりて脅威を加へられ居るのであります、之を以て觀ますれば現代の時代精神の背景には、忌むべき悪むべき悪魔主義の存在を否定することが出来得なからうと私は思ひます

世に云ふ聖賢君子と云ふ如き人は、恰も神に等しき人であり少くとも神に近い人々でありませう、私個人に於ましては我一生を私の微力に依り如何に努めましたも、私自身が神に近い人となるには余りに距離が遠いのであります、神たらんとするも神たり能ふの素質を有せざる私は、寧ろ悪魔たり、外道たるの容易なるを思ひました、又俗情より云ふも聖人となり君子たらんには窮屈であります、悪魔外道としての墮落したる放縱生活は、さまで六ヶ敷いものでなからうと思ひました私は、自己の一生を悪魔で果てたいと思ひこれを私は生に対する唯一の理想とし、この希望に對する光明を認めて、過去の私自身はこれを実践躬行して来ましたが、ホイツマンの詩の一節に「吾れもし我が愛せるものと共にあらば吾が望み違せり」又彼の論語の一句に朝聞道夕死可矣と云ふて居ますが、私はこの意義に依り自分の生そのものに執着を持たないと共に、この見地よりして無宗教無信仰主義者であります、私の生涯は過去に於ても、又現在に於きましても悪魔であり外道であるは畢竟これが為めで、將來の変化は予じめ分り兼ますが、今日の自分としては未來も私の悪魔主義で一貫したいと存じます、多くの場合に於て理想とは實際以上に美しいものとされて居りますが、高遠なる理想の現実には困難とするも、低級なる私のこの希望は遂行されぬことはなからうとの自負を有つて居ます、會て私の友人松井君より聞きました同君の人生観は私としては甚だ痛快に感じました、同君の曰く「僕の理想とする所は國務大臣となりて、僕の社会上に於ける地位を官報に依り發表して貰ふこと能はずとせば、死刑囚として果て我が生の最後の幕を政府の發行する官報紙上に以て天下に報告して貰ふたい、新聞紙に高い料金を出して親族友人とかの名を列ねて黒袴付で我訃報を広告するが如き平凡なことは蔑して貰ふ考だ」、私は男子の意気としてこの位の徹底的確信を有つて世に処す勇氣がなくてはならないと思ひました、而し私としては柄でないほど、大臣にならうとの野心も有たなければ、又死刑囚として司法や監獄の吏員に御厄介を掛けやうとの欲望も有たないほど、無神経的の平凡なる楽天生活者で、過去を顧ることを好まなければかりか未來に就ても念頭に置かない位の今日主義者であります、斯る私としての畢生の希望は希くは我は悪魔として此生を畢へたいばかりか、死後に於ても地獄の底に永久に我靈魂ともに混びたい

肉に亡ぶも靈に生きたい

と云ふ人生観を実現せる

私の悪魔主義(二) (大正九年五月一日)

森 丙午(寄)

而して私自身が悪魔を理想とせるのみか、我妻たる彼女も出来得れば毒婦たれと望んで居るのであります、私は常に彼女に告るに毒婦されと申しますが、未だ曾て良妻賢母たれとか貞女たれと要望した事はありません、私の我儘なのみか妻も随分我儘者であります、私の我儘と彼女の我儘とは多少其内容を異にして居るが故に、其我儘の型が違つて居つたのであります、私自身が我儘好きですから、玄耳先生の言を拝借して説明すれば人間の人間たる価値は我儘を貫つたに在ると云ふ論法から他の我儘をも尊重して、私の家庭では互に我儘の自由を或る程度まで認めて来たのであり、向後も尚ほ斯くありたいと思つて居ます

私は自己を没却しては自分の生が無意義になる、自分に取つては必らず是とし可とする所の、即ち自是を買かうとすると、之を阻む世間的俗情が可なり面倒臭い、これと調和を保ちて妥協生活で居れば、自是を捨てなければならぬ此場合に於ける奮勇的決行の動作は要するに我儘となるのである、これを徹底的実行を望まばこゝに悪魔主義が発生するのである、私の悪魔主義は何も時代思潮に雷同した訳でなく、明治より大正の過渡の思想界の副産物であらうと思つて居ます

凡そ生物社会は勿論宇宙間の自然の現象を見れば、何れも動いて止まないを原則として居ます、蓋し生の意義はこゝにあるのであると私は信じます、彼の戦闘の如き或は競争の如き何れも動の促進運動であります、事物の発達や進歩や向上は斯くして進みつゝあります、この意味に於て生物に闘ひなく争ひなくば生の価値を失ひます、生なくば死あるのみ、進歩なく発達なければ退歩と衰亡あるのみであります

人間の動は即ち働きであります此漢字を解剖しても分るが如く、人扁に動の字が働の文字になつて居ます、文字其ものが原則的証明を与へて居ることは注意すべき事実です、故に人間は働かなければならない、而し何が為に働くかと問はば、正直なる答をするに苦しむ事がないでせうか、普通世人は之に答ふるに、国家の為めと云ひ社会の為めと云ひ、或は一身一家の幸福の為めと云ふが如きは、理屈上雖しも言ひさうな文句であり又言はなくては知れ切つたことである、更にこれを一層露骨に俗流に考へたらば種々な答案を得るでせう、見渡す世上は食の為に働くもの最も